

漢 宋 國 子 書 院 藏 書 印

子

全
明治
43. 7. 28
丙寅

孫子目次

卷上

始計第一	一
作戰第二	一一
謀攻第三	一九
軍形第四	二九
兵勢第五	三八
虛實第六	四七

軍争第七……………六一

九變第八……………七二

卷下

行軍第九……………一

地形第十……………二〇

九地第十一……………三三

火攻第十二……………五九

用間第十三……………六六

目次畢

孫子卷の

孫子卷止

始計第一

始計第一

孫子曰く

孫子曰。兵者國之大事。

始計第一

戦争をするには其れを始める以前に於て能く敵と我との勝敗を計らねばならぬ。此の計量の精粗が聽て勝敗の分るゝ所となるのである。此の始計篇を第一に記したのである。

此書を孫子が著したのには孫子が著述をしたからである、孟子の書を直りと孟子と名付老荘子列子が書を矢張り其儘名付たのと同じである。孫子は支那古代の齊と云ふ國の人で姓を孫と稱し名を武と曰ふのである。上將軍となつて楚の國と戦ひ武威を天下に顯はした人である。孫子の美稱である。

兵者國之大

事、

死生之地、

存亡之道、

察せ不んば

ある可から

不、

故に之れ

を經するに

五事を以て

兵とは兵器のことで武具を指して云ふのであるが其れを持ち扱ふと云ふところからして其の人達を兵卒と云ふようになり終には軍戰の事をも兵と云ふのである。此の段は軍即ち戰争と云ふものは重大なものであるから容易にすべきものでないと云ふことを説いたのである。

死生之地。存亡之道。不可不察也。

戰爭と云ふものは多數の人の生死にも關し其結果によりては國家の存亡にも及ぶのであるから十分に思慮を廻らし彼我の狀況其他一般の形勢等も深く考察してから掛らなければならぬのである。

故に之れを經するに五事を以て

經は常と讀み、柱礎にすることである、以下に述べる五ヶ條の事を常に身に引き受け己れが柱となりて之を按るに務め、又た下に云ふ七ヶ條の計りことを以て彼我を比較し勝敗の機を察し其の情勢を索めなげ

し之れを按るに七計を以て其の情を索む、
一に曰く天道
二に曰く地
三に曰く將
四に曰く法
五に曰く民
道は民をし

ればならないと云ふのである。

一曰道。二曰天。三曰地。四曰將。五曰法。

上文に云ひたる五事の次第を説く。天を一番に置かず二番に置いたのは人の務めは道に在りとの義に據りたることで、人たるものにして道を務めもしないで天を論じた所が益がないとの意味で道を第一に置いたのである。

道者。令民與上同意。可與之死。可與之生。而不畏危也。

道とは大將たるものが人を使ふ道である、此の段の意味は大將が善く部下を恵み、部下亦た忠實なれば上下一致して生死を共にする、ケレドモ法令や約束が明瞭でないときは單に死を惜まないと云ふだけのことで、激戰混亂の場合に臨んで部下は其の進退を危ぶみ畏れることが

て上と意を

同らせ令之

れと與に死

す可く之れ

と與に生く

可くして危

ふさを畏れ

不

天と者陰陽
寒暑時の制

ある、斯る事のないやうにせしむるのが大將の道である。

8 天者。陰陽寒暑時制也。

陰陽とは風雨晦明晝夜などを言ふので寒暑とは暑さ寒さにて。天とは何かと云へば之れ々々のものである、是等を利用して敵を攻め或は之に依りて我が進退を決する等は將たるもの、心得べきことであると云ふのである。

9 地者。遠近險易廣狹死生也。

地理に達することは兵家の殊に肝要とする所であつて、目的地の遠近、行軍すべき土地の難易、交戦すべき場所の廣狹などは尤も詳密に熟知して居らなければならぬ、又其の地勢に據りて此れは死地である之れは生地であると判断して作戦の計畫をしなければならぬのである。

也、

地と者遠近

險易廣狹死

生也、

將と者智信

仁勇嚴也、

法と者曲制

官道主用也

凡そ此五つ

凡そ此五つ

10 將者。智信仁勇嚴也。

智とは敵の謀略を知つて味方の勝利となし、人情を能く察する等を云ふので、信とは號令嚴にして公私を能く分ち、仁とは部下を憐れみ交戦地の人民をなづけ、勇とは大敵を見ても懼れず不慮の變が生じても驚かず斷として目的を遂行するを云ひ、嚴とは軍令約束嚴重にして激戦、混戦の際でも號令一下直ちに軍を進退せしむることを云ふのである。

11 法者。曲制官道主用也。

法とは何であるかと云へば曲制、官道、及主用の三つである。其の曲制とは論制及動作に關する諸規定のことを云ふので、官道とは各部隊長の權限、後方縦列の事より陣地の布置法などの事を云ひ、主用とは物品經理等の事を云ふのである。

12 凡此五者。將莫不聞。知之者勝。不知者不勝。

の者將聞かざることを莫し之れを知る者は勝ち知らざる者は勝たざる者故に之れを以て計りて其情を索む曰く主孰れ

故に之れを以て計りて其情を索む

凡そ此の五つの事は大将としては聞かないものはあるまい。が聞いて居るだけでは役に立たない、善く此れを知つて居なければイケナイ、知つて居るものは必らず勝ち、知らないものは必ず敗けるのである、其れだから之れから下に説く七計の箇條を以て能く彼我の情況を探り索めなければならぬ。

13 曰く主孰れ有道將孰れ有能。天地孰得。法令孰行。兵衆孰強。士卒孰練。賞罰孰明。吾以此知勝負矣。

曰く彼我君主の徳孰れが高く君主たるの道に協つて居るか、其の大將たるものは彼我孰れか能力が勝れて居るか、天の時と地の理とは孰

か道有る將孰れか能ある天地孰れか得法令孰れか行はる兵衆孰れか強き士卒孰れか練れる賞罰孰れか明らかなる吾此れを以

14 將聽吾計。用之必勝。留之。將不聽吾計。用之必敗。去之。

我が將にして此の事を聽いて善く此れを用ゆるならば必ず勝つ事が出来る、其う云ふ人ならば之れを留め用ゐよう。之れを聽かないやうな人ならば敗けるに極つて居るから用いてはならない。

15 計利以聽。乃爲之勢。以佐其外。勢者因利而制權也。

て勝負を知
 る、
 將吾が計り
 ごとを聴て
 之れを用ゆ
 れば必ず勝
 つ之れを留
 めん將吾が
 計りごとを
 聴か不之れ
 を用ゆれば

此の計りごとの利あるを聴き入れたならば又た形勢を以て外より
 佐けるのである、五事七計は先づ捷木であるから内の事である、形勢と
 は敵に對して其變化に應じ不意に出で内外相應じて勝利を佐くるを云ふ
 のである、然るに形勢は時の利に因て制出することであるから大將胸中
 の機密に屬すので之れを權と云ふのである、權とは衡りの重りのことと
 輕重に應じ釣り合をとる所より出た辭である。

兵者。詭道也。故能而示之不能。用而示之不
 用。近而示之遠。遠而示之近。利而誘之。亂而
 取之。實而備之。強而避之。怒而撓之。卑而驕
 之。佚而勞之。親而離之。

詭とは慥しとも偽るとも讀む字である、兵を用ゆるものは奇變縱
 横にして計り知るべからざるとの事を云ふたのである、敵を偽り又た味

必ず敗る之
 れを去らん
 計りごと利
 あつて以て
 聴く乃ち之
 れが勢ひを
 爲し以て其
 の外を佐く
 勢ひ者利に
 因て權を制
 す、

攻其無備。出其不意。此兵家之勝。不可先
 傳也。

時に臨んでの變化は以上の事計りではない。敵の備なきを窺ひ不
 意に出ることもあるが三略にもある通り謀は密なるを尙ふと云へば何事

兵者詭道也 16

故多に能に

して之れに

不能を示し

用ひて之れ

に用ひざる

を示し近く

して之れに

遠きを示し

遠くして之れに

之れに備ふ強くして之れを避け怒しめて之れを撓る卑ふして之れを

も事前に漏らし傳へてはならないと云ふのである。

夫未戦而廟算勝者。得算多也。未戦而廟算不勝者。得算少也。多算勝。少算不勝而況於無算乎。吾以此觀之。勝負見矣。

廟とは祖宗の神靈を祭る宮なり、國家の大事たる戦を始めに就ては祖宗神靈の在る宮に於て君主重臣相會して彼我の形勢狀況等を比較考量して劃算するので之れを廟算と云ふのである、夫れで此の廟算をして見たとき算を多く得たものは勝つので此れに反するものは敗けるのである、況して少しも算の無いものは勝つも敗けるもない論外である、此の道理に依て勝敗の數を察すれば明白に分るのである。

驕らしめ佚すれば之れを勞す親むで之れを離す、

其備へ無きを攻め其の不意に出づ此れ兵家之勝は先づ傳ふ可からず、

夫れ未だ戦は未して廟算するに勝つ者は算を得ること多し未だ戦は未して廟算するに勝たざる者は算を得ること少なし算多きは勝つ算少なきは勝た不況や算無きに於てをや吾れ此を以て此を觀れば勝負見る、

作戰第二 1

1 作戰第二

孫子曰く凡 2

2 孫子曰。凡用兵之法。馳車千駟。革車千乘。帶

已でに始計を説きたるを以て、進んで作戰を説くのである。

兵を用ゆる之法。馳車千駟。革車千乘。帶甲十萬。千里糧を饋。れば内外之費へ賓客之用。膠漆之材。車甲之奉。日に千金を費やし然して

甲十萬。千里饋糧。内外之費。賓客之用。膠漆之材。車甲之奉。日費千金。然後十萬之師舉矣。

兵を用ゆるの害たることを極言するのである、實に兵は凶器で不得止此れを用ゆるにしても國家人民の被害は非常のものである、今、十萬の兵を擧げようとすれば馬四頭を要する馳車が千輛、牛十二頭を要する革車が千乘、武士が十萬、是れに要する糧秣を輸送する内外の費用、反間遊説等に使用する賓客の入費、陣中用の膠漆の材料から車甲の修繕まで一日に千金は掛る唯だ單に軍を行るだけでも斯く莫大の費用が費へるのである。

其用戰也。勝久則鈍兵挫銳。攻城則力屈。久暴師則國用不足。

後のちに十萬まん之師し舉あぐ、其戰いくさひを用ゆるもちや勝かてども久ひさしき時ときは兵へいを鈍にぶらし銳えいを挫くじきし城しろを攻せむれば力ちから屈くつす久ひさしく師しを暴さらせば國用こくよう足たり

此處は兵を用ゆるのは速きを尊ぶべしと訓ゆるのである、戰で勝つたところ久しく掛つては何にもならない、長く掛れば兵力も鈍り銳氣も挫ける、無理に城攻めをすれば兵力が勞れ屈する、久しい間軍を國外に置けば國の用度が足りなくなるのである。

夫鈍兵挫銳。屈力殫貨。則諸侯乘其弊而起。雖有智者不能善其後矣。

夫れ斯くの如く我が弱點を生じたれば他の國々が其の弊に乗じて兵を起し我を攻むるに相違ない兵力は鈍り銳氣は挫け力は屈して居る上に財力も殫きた所へ他國から攻入られるのであるから如何に智者と雖も善後の策を立てることは出来ない。

故兵聞拙速。未覩巧之久也。

其れ故戰の仕方は拙でも速く片付けるのを善いとするのであつて

だ之れ有ら
未故に盡く
兵を用ゆる
之害を知ら
ざる者は盡
く兵を用ゆ
る之利を知
ること能は
不、
善く兵を用

胄弓矢。戟楯矛櫓。丘牛大車。十去其六。

上の如くであるから百姓の費へは資産の十分の七、邦家の費へは車の破れ馬の傷み、甲冑其他の兵器から車類の物まで十中六分までは廢れ費へるのである。

故智將務食於敵。一鍾當吾二十鍾。苾秆一石。當吾二十石。

其れ故明智の將は可成敵の糧食を取るのである敵の糧食を用ゆるときは米も豆も藁も本國より取寄せる額の廿倍に當るのである、何故廿倍に當るかと云へば運賃其他餘計の費用が掛るからである。

故殺敵者怒也。取敵之利者貨也。

斯く云ふ譯であるから兵を久しく外に留めるのは善くない、味方

ゆる者は役
再び籍せ不
糧三たび載
せ不用を國
に取る糧を
敵に因る故
に軍食足る
可き也、
國之師に貧
輸者は遠く
輸すればな

車戰得車十乘以上。賞其先得者。而更其旗。車雜而法乘之。卒善而養之。是謂勝敵而益強。

例へば車戰の時敵に勝ちて車の十乗も分捕りしたらば其車に乗つて居た敵方の者の中第一番に降参した者を恩賞して旗指物は味方の物と更め其の車は味方の車に雜へて用ゆることとし、又た降参の士卒は善く待遇して之れを撫養するのである、斯くすれば敵の失ひたるだけ味方に増すのであつて之れが敵に勝て強きを益すと云ふのである。

故兵貴勝不貴久。故知兵之將。民之司命。國

家安危之主也。

り遠く輸す
る時は百姓
貧し師に近
き者は賣り

故に軍は速かに勝つ事は貴ぶけれども久しく掛つて勝つ事は貴ば
ないのである、其れ故に兵法に達したる大將は萬民の生命を司る者であ
つて又た國家の安危存亡を主どる所のものである。

を貴くす賣りを貴くする時は百姓の財竭く財竭くるときは兵役に急な
り力屈し財殫き中原の内家に虚し、

百姓之費へ十に其の七を去る公家之費へ車を破り馬を罷らし甲冑弓矢
戟楯矛櫓丘牛大車十に其の六を去る、

故に智將は務めて敵に食す一鍾吾が二十鍾に當る意秬一石吾が二十石
に當る、

故に敵を殺す者は怒なり敵之利を取る者は貨也、

車戦に車十乗以上を得れば其の先づ得る者を賞して其の旌旗を更め車
雜はりて法之れを乗せ卒は善くして之れを養ふ是れを敵に勝ちて強さを
を益すと謂ふ、

故に兵は勝つを貴んで久しきを貴ば不故に兵を知る之將は民之司命國
家安危之主也、

謀攻第三
2

謀攻第三

釋義

謀計を以て敵城を攻ることを説くのである。

孫子曰く夫れ兵を用ゆる之法國を全たくするを上と爲國を破る之れに次ぐ軍を全たくするを上と爲軍を破る之れに次ぐ旅を全

孫子曰く夫れ兵を用ゆる之法國を全たくするを上と爲國を破る之れに次ぐ軍を全たくするを上と爲軍を破る之れに次ぐ旅を全

是故百戰百勝。非善之善者也。不戰而屈人之兵。善之善者也。

之れは賢君名將は兵を動かさずして戰を爲すを好まない萬不得止して戰ふとの意にて述べるのである、故に用兵の法の先づ第一は自他ともに兵を動かさずして敵國をして、自ら形勢究まり歸服又は降參せしむるを國全しと云ふので上々の計である、が其れが出来なければ敵國を打破るの外はない、全軍以下の意亦同じである、一軍は一萬二千五百人一旅は五百人一卒八百人一伍は五人なり。

たくするを上と爲旅を破る之れに次ぐ卒を全たくするを上と爲卒を破る之れに次ぐ伍を全たくするを上と爲伍を破る之れに

然れば百度戰て百度勝つと云ふ事は善いには相違ないが未だ善の善なるものと云ふ事は出来ないものである、戰はないで敵兵を屈服せしめるのを善の善なるものとするのである。

故上兵伐謀。其次伐交。其次伐兵。其下攻城。

其れであるから兵を用ふる事の上手と云ふのは謀略を以て敵の謀計を伐ち我も動かなければ敵も動かさしめない此れが上の手段である其の次は相手國の助けともなるべき親密の交りある國を此方へ取り込むとか又は離間するかして敵を孤立せしむるのである、第三としては兵を伐つ即ち戰ふのである而て最後に下の手段としては城を攻むるのである。

攻城之法。爲不得已。脩櫓轂輜。具器械。三月而後成。距堙。又三月而後已。

次ぐ、
謂か 是故に百戦
謂か 百勝は善之
謂か 善なる者に
謂か 非ざる也戦
謂か は不して人
謂か の兵を屈す
謂か るは善之善
謂か なる者也
謂か 故に上兵は

釋 城を攻めると云ふ事は費用が多く掛り兵を損ずる事が多くて甚だ
 不利益の事であるから萬不得已して之れを爲すのである。けれども城を
 攻めるには櫓とか、濠を埋めるに用ゆる轆轤車を作り尙ほ種々の器械を
 製さればならぬ故三月も経なければ出来な、其外に距離とて向城を構
 へなければならぬが之れが亦三月の日時を要して始めて出来上るので
 ある斯くの如く準備のみにても多額の費用と多くの日時を要するので
 ある。

將不勝其忿而蟻附之。殺士卒三分之一。而
 城不拔者。此攻之災也。

釋 前に述べた如くの準備をして掛りても敵の守り堅く城兵善く守り
 て動かざるときは我は終に氣を忿ち短兵急に力攻めに落そうとして總軍
 で攻め掛け兵を下知して蟻の如くに城に乗り附かしめる斯る攻め方をす
 れば必らず士卒の三分の一を失ひ而も城を抜く事は不可能である此等を
 城攻の災と云ふのである。

謀ごとを伐
 ち其の次は
 交はるを伐
 ち其の次は
 兵を伐ち其
 の下は城を
 攻む、
謂か 城を攻る之
謂か 法已むこと
謂か を得不着が

故善用兵者。屈人之兵而非戰也。拔人之城
 而非攻也。毀人之國而非久也。必以全爭於
 天下。故兵不頓而利可全。此謀攻之法也。

釋 故に善く兵を用ゆる大將は敵兵を屈服せしむるのであつて戦いは
 しないのである、敵城を抜くのであつて攻めると云ふことはしない、久し
 く掛らずして敵國を毀るので必らず完全を以て天下に争ふのであるから
 少しも兵氣を鈍らさないで利を全くする事が出来る、如斯き事を謀攻の
 法とするのである。

故用兵之法。十則圍之。五則攻之。倍則分之。
 敵則能戰之。少則能守之。不若則能避之。故
 小敵之堅。大敵之擒也。

爲めなり櫓
 輶を脩め
 器械を具へ
 三月にして
 後成るる距
 堙又三月に
 して後已む
 將其の怒り
 に勝へずし
 て之れに蟻
 附すれば士

上に論じた如くであるから茲に用兵の法を説かふ、味方の兵數敵に十倍ならば之れを包圍して其の降參するのを待つも宜しい、五倍ならば攻めるが宜しい、二倍ならば奇正の二つに分けて戦ふが宜しい、匹敵する人數ならば一生懸命に能く戦へ、味方が少なれば能く守るが宜しい、人數は勿論其の事も到底敵に若かないと見たらば甘く敵を避けて敗れを取らないように仕なければならぬ、若し血氣を頼んで小勢を以て大敵に當るならば必らず擒となつて恥辱を蒙るのである。

夫將者。國之輔也。輔周則國必強。輔隙則國必弱。

大將たる者は國家の輔翼である、其の輔翼たる者が用心周到ならば國は必ず強くなるのである、之れに反して意を用ゆるに隙があれば其國は必ず弱くなるのである、故に君主たる者が大將を選むに當つては能く其才徳を調べ其心を知つて飽くまでも信任すべき人を任じなければならぬ然もないと軍の爲め甚だ患ふべき事が生じて來る。

卒三分の一
 を殺して城
 拔けざる者
 は此れ攻る
 の災はい也
 故に善く兵
 を用ゆる者
 は人之兵を
 屈す戦ふに
 非ざる也人
 之城を拔く

故軍之所以患於君者三。

如斯く大將なるものは大切なものであるが其君主なるものが軍事に暗きため兎角餘計な差圖をして軍の患ひを爲す事が三ツある。

不知軍之不可以進。而謂之進。不知軍之不可以退。而謂之退。是謂糜軍。不知三軍之事。而同三軍之政。則軍士惑矣。不知三軍之權。而同三軍之任。則軍士疑矣。三軍既惑且疑。則諸侯之難至矣。是謂亂軍引勝。

其の一つは進む可らざる時に無理に進めと指圖したり、退く可らざる時に譯もなく退けと命じたりする事である、之れを名付けて糜きた

攻るに非ざる也。人の國を毀て久しきに非ず必ず全を以て天下を争ふ故に兵頓らずして利全ふす可し此謀攻之法也。

謂方 8

る軍と云ふのである、第二は軍の事を知らない者を軍中に遣はして大将の相談役とする事である、斯る素人が軍の樞機に關與する事があると部下の軍士は大将の信任に就て疑惑を生じ軍の爲め不利益を來たすのである、第三は軍權即ち臨機應變の策を建てる事を知らない者をして大将同格の任を與へ軍事に遣はす事である、斯る人物が軍中にあるときは軍士は何れに従つて善いかと狐疑を生ずる、以上の如く軍中に狐疑疑惑を生じ軍容整はざる時は他國から其隙を窺はれるに相違ない、此等の事を軍を亂して敵の勝を引くと謂ふのである。

故知勝有五。知可以與戰不可與戰者勝。識衆寡之用者勝。上下同欲者勝。以虞待不虞者勝。將能而君不御者勝。此五者知勝之道也。

故に兵を用ゆる之法十なれば之れを圍む五なれば之れを攻む倍なれば之れを分つ敵しければ能く之れと戦ふ少なければ能く

勝つ可きの道理を知るに五つの箇條がある、第一は戦ふべき時と戦ふ可らざる時とを知る事である、第二は時と場合を察し適度の兵數を用ゆる事である、第三は上下一致其の嗜欲を同ふし艱難を俱にする者は勝つのである、第四は吾が虞り整ひたる軍を以て虞り整はざる軍を待ち設ける事である、第五は大将に才能ありて而して其君主が充分に信任を置き毫も軍の行動を制御せざる事である、此の五つが勝を知るの道である。

故曰。知彼知己。百戰不殆。不知彼而知己。一勝一負。不知彼不知己。每戰必敗。

敵を知り味方を知つて後に戦へば百度戦つても殆うき事はない勝つに定まつて居る、敵を知らないで味方計りを知つて戦へば勝負は五分五分である、敵の事も知らなければ味方の事も分らないで戦へばいつも敗けるのである。

之れを守る若か不れば能く之れを避く故に小敵之堅は大敵之擒也、

夫將者國の輔也輔け周ければ國必ず強く輔け隙あれば國必ず弱し、

故に軍の君に患る所以の者三、

軍の以て進む可らざるを知らずして之れに進めと謂ふ軍の以て退く可らざるを知らずして之れに退くと謂ふ是れを糜軍と謂ふ三軍之事を知らずして三軍之政りことを同うするときは軍士惑ふ三軍之權を知らずして三軍之任を同うするときは軍士疑ふ三軍既に惑ふて且つ疑ふときは諸侯之難至る是れを亂軍引勝と謂ふ、

故に勝を知るに五有り以て與に戦ふ可く以て與に戦ふ可らざるを知る者は勝つ衆寡之用を識る者は勝つ上下欲を同うする者は勝つ虞を以て不虞を待つ者は勝つ將能にして君御せざる者は勝つ此五の者は勝を知る之道也、

故に曰く彼れを知り己れを知れば百戦殆からず彼れを知らずして己れを知るは一勝一負彼れを知らず己れを知らずれば毎戦必ず敗る、

軍形第四

軍形第四

前篇に戦争の不利なることを詳論したり、然れども萬不得止戦ふことある故此所に軍の形勢を論するのである。

孫子曰昔之善戰者先為不可勝以待敵之不可勝。不可勝在己。可勝在敵。故善戰者能為不可勝。不能使敵之必可勝。故曰。勝可知。而不可為。

孫子曰。昔之善戰者。先為不可勝。以待敵之不可勝。不可勝在己。可勝在敵。故善戰者。能為不可勝。不能使敵之必可勝。故曰。勝可知。而不可為。

昔より戦を善くする將は敵に勝たれないように準備を十分に仕て置いて敵に勝つべきの謀略を廻らして敵を待つのである。敗けざるよう勝たれざるようとは將たる者の徳が備はり居つて將たるの道を行ひ法令嚴に兵強く糧足り而も天の時地の理とも得た事を云ふので斯様であるから負けることは無い、此上は敵に勝つより外ないのである、勝つ事は知れて居るが何時でもと云ふ譯にはならない敵の虚を待たなければならぬのである。

不可勝者守也。可勝者攻也。守则不足。攻則

きは敵に在り故に善く戦ふ者は能く勝つ可からざるを爲し敵をして必ず勝つ可からず使むること能は不故に曰く勝知る可くして

有餘。

備を完全にして能く守る故不可勝者の形ちがある、又攻めるから可勝の形ちがある、であるから敵を攻めて勝を取る事もあれば敵の攻めるに依りて勝を得る事もある、守るのは力の足らない時の事で、攻ると云ふのは力の餘つた時の事である。

善守者。藏於九地之下。善攻者。動於九天之上。故能自保而全勝也。

善く守る者は敵如何に攻めるも九地の下に藏れた如く深く深く形を匿くして知る事が出来ない、善く攻る者は敵如何に善く守るも天上の動きの如く自由自在に動いて攻め落さずには置かない、であるから我は善く自ら保つて時の熟するを待ち勝を全ふするのである。

爲す可らず不

【訓】

勝つ可から
ざる者は守
る也勝つ可
き者は攻む
る也守るは
足らなければ
なり攻むる
は餘り有れ
ばなり、

見⁵勝不過衆人之所知。非善之善者也。戰勝
而天下曰善。非善之善者也。

【釋】 戰を善くして勝を取ると云ふ事は有形の上に云ふのではなく無形
の間に勝を得る事である、攻め難きを攻め敗を取らず勝ち難き場合に利
を得る事は功には相違ないが衆人の認め得る程の理ならば善の善なるも
のと云ふ事は出来ない例へ戦に勝て天下舉つて賞賛するとも未だ決して
善の善なるものと云ふ事は出来ないのである。

故⁶舉秋毫不爲多力。見日月不爲明目。
聞雷霆不爲聰耳。

【釋】 其の譯は秋に脱ける鳥獸の毫や毛を持擧げて人も人はあの人には力が
あるとは云ふまい、日月を見る事が出来たとて眼が明らかだと云ひは
せまい、又た雷鳴を聞いたからとて人は聰き耳だとは云ひは仕ない。

【訓】
善く守る者
は九地の下
に藏る善く
攻むる者は
九天之上に
動く故に能
く自ら保つ
て全く勝つ、
勝つを見るは
衆人之知る

古⁷之所謂善戰者。勝於易勝者也。故善戰者
之勝也。無智名。無勇功。故其戰勝不忒。

【釋】 古代に謂ふ所の戰を善くする大將と云ふものは其の勝ち易き者に
勝つので敢て兵士や糧食等を費やさない、であるから一向目に立たない、
随つて智者とか功者とか云ふ名も立ない、其れは何故と云へば枝を何時
となく切り落して終に大木を枯らす様な手段を取るからである、其れ故
大功は目立ないが勝つ事は間違ないのである。

不⁸忒者。其所措勝勝已敗者也。

【釋】 勝つ事の忒はないと云ふのは遠大の策に據り勝つべき圖を設けて
置くから敵は已てに敗れて居るのである、敗れて居るものに勝つのであ
るから違はないのである。

故⁹善戰者。立於不敗之地。而不失敵之敗也。

所^とろに過^すぎず善^{ぜん}の善^{ぜん}なる者^{もの}に非^{あら}ざる也^{なり}。戰^{たたか}ひ勝^かつて天下^{てんか}善^{ぜん}と曰^いふは善^{ぜん}の善^{ぜん}なる者^{もの}に非^{あら}ざる也^{なり}。故^{ゆゑ}に秋^{しゅう}毫^{ごう}を擧^あげざるは多^た力^{りき}と爲^せす。不^ず日^{じつ}月^{げつ}と爲^せす。

是故勝^レ兵先勝而後求^レ戰。敗兵先戰而後求^レ勝。

釋義 故に善く戦ふ將は敗けない地位に立て敵をして我れに勝つ事の出來ざる様にして置くのである、之れであるから勝つ方は形勢上已でに勝つてから戦を求め、敗ける方は戦つて而して後に勝ちを求めようとするのである。

善¹⁰用^レ兵者。修^レ道而保^レ法。故能爲^レ勝敗之政。

釋義 善く兵を用ゆる者は將たるの道を修めて法を重んじて之を保ち部下及人民を心服させて勝敗を自己の自由に爲し得るまでに軍政を修めるのである。

兵法。一曰度。二曰量。三曰數。四曰稱。五曰勝。

を^み見るは明^{めい}目^{もく}と爲^せす。不^ず雷^{らい}を聞^きくは、雷^{らい}を聞^きくは、聽^そうじと爲^せす。不^ず古^こへ之^の所^の謂^いは善^よく戰^{たたか}ふ者^{もの}は勝^かち易^{やす}きに勝^かつ者^{もの}也^{なり}。故^{ゆゑ}に善^よく戰^{たたか}ふ者^{もの}の勝^かつや智^ち名^{めい}無^なく勇^{ゆう}功^{こう}

釋義 此の五事は兵家の大切なる事で委しい説明は下の如くである。

地¹²生^レ度。

釋義 凡そ戦争は地理を第一とする地理とは山川原野の形状道路の難易長短を云ふので築城、布陣、廣狹、曲直等皆な丈尺を用ゐて度るのであるから地に附ては度の必要を生ずると云ふのである。

度¹³生^レ量。

釋義 量とは斗斛の事にて物を積り計る事である既に地理を度りて後は彼我の強弱優劣糧食の多少陣の布置人員の多少等量り置かればならぬのである。

量¹⁴生^レ數。

釋義 定む可からずして限りあるを數と云ふ、陣營の布置、人數の配置、

無し故に其の戦い勝つこと、忒は不、忒不者は其の勝を措く所る已でに敗る者、者に勝つ也、故に善く戦ふ者は敗せ

15 數生稱。

其他の事總べて宜しきに協ふ様に分合するのである。稱は「ばかり」と讀む右の數に依り分合したる處を敵と我との萬事に比較して稱るのである。

16 稱生勝。

敵が稱り整はずして輕卒であつて、味方は善く整ひて嚴重であれば味方は必らず勝つのである。

17 故勝兵若以鎰稱銖。敗兵若以銖稱鎰。

故に勝つ方は二百目の重さある鎰を以て四分餘の銖を稱ぐる如きもので敗る方は此の反對である。(鎰は二百目銖は四分一厘六毫)

18 勝者之戰。若決積水於千仞之谿者。形也

勝つ方の戰の勢ひは恰も積み溜りたる水を千尋もある谷へ切り落す如き形ちである

不る之地に立て敵之敗を失はざる是故に勝兵は先づ勝て後戦ひを求む敗兵は先づ戦ふて後勝を求む、善く兵を用ゆる者は道を修めて法を保つ故に能く勝敗の政ことを爲す兵の法一に曰く度二に曰く量三に曰く數四に曰く稱五に曰く勝、地、度を生ず、度、量を生ず、

量、¹⁴ 數を生ず、
 數稱を生ず、¹⁵
 稱、¹⁶ 勝を生ず、
 故に勝兵は鎰を以て銖を稱ぐが若し敗兵は銖を以て鎰を稱る若し、¹⁷
 勝者の戦ひは積水を千仞之谿に決るが若き者は形ち也、¹⁸

兵勢第五

1 兵勢第五

兵を用ゆるの方法は既に述べたるも尙ほ形勢を持たすべきは戦

孫子曰く凡そ衆を治むるは寡を治むるが如し、²
 分數是也、³
 衆に闘ふは寡に闘ふ如し、⁴
 形名是れ也、⁴
 三軍之衆必

孫子曰。凡治衆如治寡。分數是也。
闘に於て必要なるを以て説くのである。

衆に闘ふは寡に闘ふ如し。形名是れ也。
大勢澤山の衆を善く治めて小人数を取扱ふ如く仕なければ爲らない、其れには數を分つ事が必要である。

三軍之衆可使必受敵而無敗者。奇正是也。
多數を闘はすにも小人数を闘はす如く爲なければならぬ是れを爲るには形名即ち諸種の合圖を以て爲るのである。

三軍をして敵に當らしめても必ず敗けないようにするには奇正の術を用ゆるのである奇正とは進退變化に富み先、後、遠近、遲速等計り

ず敵を受て
 敗れ無ら使
 び可き者は
 奇正是れ也
 兵之加ふる
 所る礮を以
 て卵に投る
 如き者は虚
 實是れ也
 凡そ戦ひ者

知らしめざるを云ふのである。

兵之所加。如以礮投卵者。虚實是也。

我軍の攻るところ石を以て卵に投げ付ける如くに敵を破るには虚實の法を用ゆるのである。

凡戦者。以正合。以奇勝。

凡へて戦と云ふものは正軍を以て向ひ合ひ奇軍を以て勝つのである。

故善出奇者。無窮如天地。不竭如江海。

善く奇兵を使ふものは其策究りなき事天地の如く竭きざる事は江海の如くである。

正を以て合
 せ奇を以て
 勝つ、
 故に善く奇
 を出す者は
 窮り無きこ
 と天地の如
 く竭きざる
 こと江海の
 如し

終而復始。日月是也。死而更生。四時是也。

終りかと思へば復た始める丁度日月の西へ沈だと思ふと東るか如く死んだと思ふと生きて来る丁度春夏秋冬四時の變化の如きである。

聲不過五。五聲之變。不可勝聽也。

音聲と云ふものは唇舌牙齒喉より出る五音に過ぎない、けれども此の五音の變化は聴き分けられないのである。

色不過五。五色之變。不可勝觀也。

色も五色に過ぎない、が此の五色の變化が眼で見盡す事は不可能である。

味不過五。五味之變。不可勝嘗也。

終つて復た
始まる日月
是れ也死し
て更に生ず
四時是れ也
聲五に過ぎ
不五聲之變
勝げて聴く
可ら不
色五に過ぎ

味とても鹹苦酸辛甘の五味に過ぎないのであるが扱て此の變化が
嘗め分ける事は出来ないものである。

戰勢不過奇正。奇正之變。不可勝窮也。奇正
相生。如循環之無端。孰能窮之哉。

戰勢とても奇正の二つに過ぎないのであるが此の奇正の變化が究
め盡す事は出来ない奇正相互に生ずる有様は恰も循環の端の無いのと
同じく誰れも能く究める事は出来ない。

激水之疾。至於漂石者。勢也。

水は極く靜かなるもので柔かなものであるが激水となれば石を漂
はすでは無いか此れは勢ひと云ふものである。

鷺鳥之疾。至於毀折者。節也。

鷺鳥とは鷹や鷲の類を言ふので此等の鳥が他の大きな鳥獸を毀く
るのも疾き中に自ら進退節度に協ひ圖を外さぬからである。

故善戰者。其勢險。其節短。

であるから上手に戦争をするものは其勢ひを鋭しくして其節を短
かくする。

勢如彊弩。節如發機。

勢は弩(石弓)を張る如く激しく、節は弩の引金なる機を發つ如く
迅速でなければならぬ。

紛紛紜紜。鬪亂而不可亂。渾渾沌沌。形圓而不
可敗。

不五色之變
勝げて觀る
可ら不
味五に過
不五味之
變勝げて嘗
む可ら不
戰勢奇正に
過ぎ不奇正
之變勝げて

紛紛紜紜17 亂れ17 不17

渾渾沌沌18 形18 圓18 にして敗る可から不18

亂治18 に生じ怯勇18 に生じ弱強18 に生じ治亂18 は數也勇怯18 は勢18 ひ也強弱18 は形18 ち也18

故19 に善く敵19 を動かす者19 は之19 に形19 ちして敵19 必ず之19 に従19 ふ之19 に予19 へて敵19 必ず之19 を取る利19 を以て之19 を動19 す本19 を以て之19 を待19 つ、

故22 善戰22 人之勢22。如轉22 圓石於千仞之山者22。勢也22。

故に上手に人の戦はしたるの勢は恰も圓い石を千尋の高い山より轉がり落す如くに爲る之れが勢と云ふのである。

故20 に善く戦ふ者20 は之20 を勢20 ひに求20 む之20 を人20 に責20 め不故20 に能20 く人20 を擇20 で勢20 ひに任20 す、

勢21 ひに任21 す者21 の其21 の人21 を戦21 はしむる木石21 を轉21 ずるが如21 く木石21 之性安21 とさは静21 なり危21 きときは動21 く方21 なるときは止21 む圓21 なるときは行21 く、

故22 に善く人22 を戦22 はしむる勢22 ひ圓石22 を千仞22 之山22 より轉22 ばすが如22 き者22 は勢22 ひ也22、

虚實第六1

虚實第六1

此の篇は前に云ふた虚實と云ふ事を説くのである。

孫子曰凡先處戰地而待敵者佚。後處戰地而趨戰者勞。

孫子曰。凡先處戰地而待敵者佚。後處戰地而趨戰者勞。

凡そ敵味方何れでも先きに戰地に居て敵の來るのを待つ者は佚安即ち落附いて居るから勝つ事が出来る、後から戰地へ趨き行て戰ふ者は勞れて居るから敗けるのである。

故善戰者致人而不致於人。

故に戰の上手の者は人を致し來らしめて我は人に致されないのである。人を致すとは吾が虚を實とし敵の利を吾が利とするを云ふ

能使敵人自至者。利之也。能使敵人不得至者。害之也。

至者。害之也。

致されず、能く敵人を能く自から至ら使むる者は之を利すれば也、能く敵人をして至ることを得ずら使むる者は之を害す

敵自身をして來り至らしむるは彼をして利ある如く思はしむるからである、敵をして來る事を得ざらしむるものは彼に害ある如く見せるからである。

故敵佚能勞之、飽能飢之。安能動之。出其所不趨。趨其所不意。

故に敵が佚樂して居ると思へば策を設けて之れを疲勞させ糧食多く飽く程あれば焼くとか奪ふとかして之を飢やし安靜なれば之を動かし敵の氣の着かない所へ出て意ひ掛けざる所を打つのである。

行千里而不勞者。行於無人地也。攻而必取者。攻其所不守也。守而必固者。守其所不攻也。

れば也なり 故に敵佚すてきいつ れば能く之こ 力を勞し飽あ ければ能く之こ 力を能く之こ けを能く之こ れを飢し安あん ずれば能くよく 之れを動かうご ず其の趨おも ざる所にい 出で其の意は

7 故善攻者。敵不知其所守。善守者。敵不知其所攻。

釋義 攻め上手者のは敵を惑はすから敵が何處を守れば善いか其の所を分らなくする、又善く守る者は敵をして何所を攻めれば善いか分らないように爲る。

8 微乎微乎。至於無形。神乎神乎。至於無聲。故能爲敵之司命。

釋義 如斯く虚實と云ふものは微妙にして無形無聲神變計り難きもので

ざる所に趨おも むく、
 6 行くこと千里にして勞せず者もの は人無き地ち を行けば也なり 攻めて必ず取と る者は其守まも らざる所を

ある其れ故に良將兵を運用すれば敵の生殺與奪は自由自在である實に敵の司命者である。

9 進而不可禦者。衝其虚也。退而不可追者。速而不可及也。

釋義 味方進むに敵禦ぎ能はざるは敵の虚を衝くからである、味方退くに敵の追撃せざるは我が動作迅速にして彼れ及ぶ能はざるからである。

10 故我欲戰。敵雖高壘深溝。不得不與我戰。者。攻其所必救也。我不欲戰。雖畫地而守之。敵不得與我戰者。乖其所之也。

釋義 斯く變化自在であるから我れ戦はんと思へば假令敵が壘を高くし

攻れば也守
 りて必ず固
 き者は其攻
 不る所を守
 れば也
 故に善く攻
 ひる者は敵
 其の守る所
 を知らず善
 く守る者は
 敵其の攻む

溝を深く掘りて堅固に守るとも是非出て戦はればならぬ様に爲る、之れは敵が之れに依つて救ひ助からんと思ふ所を攻めるからである、之れに反して我れ戦ふまじと思へば地に筋を畫いて之れを守る計りでも敵は我と戦ふ事は出来ない、此れは敵をして我が之く方向に乖かしむるからである。

11 故形人而我無形。則我專而敵分。我專爲一。敵分爲十。是以十攻其一也。則我衆敵寡。能以衆擊寡則吾所與戰者約矣。

【釋義】 故に實に於ては我れ何等の變化も無きも奇を以て種々の大勢を示せば我は専らにして敵の勢は分裂する我は専ら一と爲つて居るには敵は分れて十と爲る、我が全隊を以て敵の此の一隊へ掛れば十を以て一を攻るのであるから我は衆く敵は寡いから吾れは勝つに定まつて居るのである。

る所を知
 らず、
 微なる乎微
 なる乎無形
 に至る神な
 る乎神なる
 乎無聲に至
 る故に能く
 敵之司命と
 爲る、

12 吾所與戰之地不可知。不可知。則敵所備者多。敵所備者多。則吾所與戰者寡矣。

【釋義】 吾れの戦はんと思ふ所の地は敵に知らしてはならない、斯くすれば敵は所々へ備へなければならぬ、敵が所々へ備へれば其の兵數が割れるから吾れと戦ふ敵の勢は寡くなる。

13 故備前則後寡。備後前寡。備左則右寡。備右則左寡。無所不備。則無所不寡。寡者。備人者也。衆者。使人備己者也。

【釋義】 斯く前後左右各方面に兵を備へれば自然に兵數が割れるから各方面とも兵數の衆い所は無い如斯く寡くする方は敵に備へる爲めである敵

れば地を畫して之れを守ると雖も敵我れ與戰ふを得ざる者は其の之く所を乖けば也、
讀 故に人に形して我れ形無れば我れ

智者不能謀。因形而措勝於衆。衆不能知人皆知我所以勝之形。而莫知吾所以制勝之形。

讀 故に兵の形ちは種々有れども其の極は終に無形に至るのである形ちが無ければ間者も窺ふ事が出来ず智者も謀る事は出来ない然れども敵に示す所は形ちである形を以て敵に示して敵衆の變動虚實を見て其間に勝利の道を定め置くのであるから敵は之れを知る事が出来ない、其れ故人々は勝つ時の形ちは知るけれども如何なる形を以て勝を制したと云ふ所以を知る事は不可能である

故其戰勝不復。而應形於無窮。

讀 故に其の戰に勝つた形ちは復た二度とは用ゐない敵の形勢に應じて無窮に案出せればならない

専らにして敵分る我れ専ら一と爲れば敵分れて十と爲る是れ十を以て其の一を攻る也我れ衆く敵寡なし能く衆を以て寡を撃

夫兵形象水。水之形。避高而趨下。兵之形。避實而擊虚。故水因地而制流。兵因敵而制勝。

讀 兵を用ゆるの形ちは水に象る事が出来る水は高きを避けて低きに趨く兵の形ちは實を避けて虚を打つてであるから水は地勢に因つて流れが變化する、兵も敵に因つて勝敗の變化がある。

故兵無常勢。水無常形。能因敵變化而取勝者。謂之神。

讀 水に一定した常形の無いと同じく兵にも常勢と云ふものは無いから能く敵に因つて千變萬化の策を施し勝ちを取るものを神妙不測と云ふのである。

故五行無常勝。四時無常位。日有長短。月有

つときは吾
が與に戰ふ
所の者は約
なり

死生

五行水火木金土の水は火に勝ち火は木に勝つは定めであるが何れも常に相勝つとは定め難く四時とても常に變化し日月にも長短晦明がある況や活物を應用する軍の事に於て何ぞ變化の無い事があるう實に千變萬化究りないものである。

吾れ與に戰ふ所の地知らしむ可からざる時は敵備ふる所の者多ほし
敵備ふる所の者多きときは吾が與に戰ふ所の者寡なし、

故に前に備はれば後ろに寡なく後ろに備はれば前に寡なし左りに備ふれば右寡なく右に備ふれば左り寡なし備へざる所無きときは寡なからざる所無し寡なき者は人に備ふる者也衆き者人をして己れに備へ使ひる者也、

故に戰ひ之地を知り戰ひ之日を知るときは千里にして會戰す可し戰地を知らず戰日知らざれば左りは右を救ふこと能はず右は左を救ふこと能はず不前は後へを救ふこと能はず不後へは前を救ふこと能はず不而るを況や遠き者數十里近き者數里を乎、

吳を以て之を度るに越人之兵多しと雖も亦奚んぞ勝つに益あらん哉故に曰く勝ち爲す可き也敵衆しと雖も鬪ふこと無から使む可し、

故に之れを策つて得失之計ごとを知る之れを作つて動靜之理を知る之れを形ちして死生之地を知る之に觸て有餘不足之處を知る、
故に兵に形ちする之極形ち無きに至る形ち無ければ深間も窺ふこと能

は不智者も謀ること能は不形ちに因て勝ちを衆に措く衆知ること能は
不人皆な我が勝つ所以之形ちを知れども吾が勝ちを制する所以之形ち
を知ることを莫し、

故に其の戦ひ勝ちて復せ不形ちに應じて於に窮り無し、

夫れ兵の形ちは水に象る水之形ちは高きを避て下に趨く兵之形ちは實
を避て虚を撃つ故に水は地に因て流を制し兵は敵に因て勝を制す、
故に兵に常勢無く水に常形無し能く敵に因て變化して勝を取る者之れ
を神と謂ふ、

故に五行に常勝無く四時に常位無し日に長短有り月に死生有り、

軍争第七

1 軍争第七

孫子曰く凡

軍争とは勝利を争ふと云ふ事である此の篇は其れ等に関する事を
説いたものである

孫子曰。凡用兵之法。將受命於君。合軍聚衆。
交和而舍。莫難於軍争。

軍を合せ衆
を聚め和を
交へて舍す
軍争より難
きは莫し、

3 軍争之難者。以迂爲直。以患爲利。故迂其途。

凡そ戦を爲す作法は大將たる者君主の命を受け軍隊を組織し多く
の兵を聚めて敵に對するのであるから中々容易な事ではないが而も其上
に勝利を得ようと爲るのであるから實に難いのである、和とは和門と云
ひ軍門の事である、交和而舍すとは對陣すると云ふ事である。

軍争の難き者、迂を以て直と爲し、患ひを以て利と爲す。故に其の途を迂にして之を誘くに利を以てす。人に先だ

而誘之以利。後人發。先人至。此知迂直之計者也。

軍争の難いと云ふ譯は道遠き迂路を何等かの方策を用いて近き直路に變せしめ、我が患いと爲る事も手段を以て利益に變じる様に爲なければならぬ、故に我が遣り方を迂遠に見せて態と利を以て敵を誘ひ、敵に後れて軍を發して而も敵より先に目的地に達するのである。此れを上手に爲る者を迂直の計り事を知る者と云ふのである。

軍争爲利。衆争爲危。舉軍而争利則不及。委軍而争利。則輜重損。

彼我ともに地勢情況に應じ軍の隊伍を分けて戦ふときは利を得るけれども衆兵一郡となりて無茶苦茶に闘ふときは危殆を來すのである。

つて至る此れ迂直之計を知る者也。軍争は利と爲し衆争は危と爲し軍を舉て利を争へば及ばず。不軍を委て利を争へば輜重損たる。

みならず進退不便で敵の變化に應じる事が出来ない。又た軍衆各自が勝手に行動する時は全軍の連絡取れず爲に運動自由ならざる輜重の如きは棄てられて敵に取られるのである。

是故卷甲而趨。日夜不處。倍道兼行。百里而争利。則擒三將軍。

其れであるから鎧も着ないで晝夜兼行平常の倍も行軍した上で戦へば敗るのは當然で大將までも擒になるのである。

勁者先。疲者後。其法十一而至。五十里而争利。則蹶上將軍。其法半至。三十里而争利。則三分之二至。

是の故に甲を巻いて趨る日夜處まら不道を倍し行を兼ね百里にして利を争へば三將軍を擒にせらる、
【論方】 6 勁き者は先

【譯】 前に云ふた如く無理な行軍を爲れば勁い者は先に行き弱く疲れた者は後れて十分の一位いより行き着かない、五十里の所で戦へば半分位しが役に立たないから前軍の將は敗れ蹶き、三十里の所で戦へば三分の二しか役に立たない。

7 是故軍無輜重則亡。無糧食則亡。無委積則亡。

【譯】 斯る無理な行軍を仕た所で輜重や糧食や馬糧薪炭等が續かないから其軍は亡ぶより外はないのである、委積とは馬糧薪炭の事である

8 故不知諸侯之謀者不能豫交。不知山林險阻沮澤之形者不能行軍。不用鄉導者不能得地利。

【譯】 戦争を始める前には隣國又は關係國と諍みを親くして置かなければならないが扱て其の國々が既に敵と通じては居ないが又は如何なる考を以て居るか云ふ事を確めて掛らなければ此の交誼を申込む事は出来ない、山林險阻沮澤等の地形を知らなければ軍を行る事は出来ない、其の土地の地理に委しい道案内を用いなければ地の利を得る事は出来ないのである。

9 故兵以詐立。以利動。以分合爲變者也。

【譯】 兵は詐術を以て立ち利を以て敵味方を動かし分合即ち進退を以て千變萬化を爲すのである。

10 故其疾如風。其徐如林。侵掠如火。不動如山。難知如陰。動如雷震。

【譯】 進退の疾き事風の如く徐かな時は林の如く、侵し掠めるに當ては

ち疲れたる者は後る其法十の五にして至る五里にして利を争へば上將軍を蹶す其法半ば至る三十里にして利を争へ

三分之二

至る

是故

輜重

無時

糧食

無時

則亡

委積

無時

則亡

故に

諸侯

之

猛火で焼く如く動かない時は山の如く其の動靜の知り難い事は天地の曇るが如く動けば雷の如く激しく動くのである。

11 掠郷分衆。廓地分利。懸權。而動先知迂直之計者勝。此軍争之法也。

兵を配分して敵地の糧秣を掠め、地を廣むれば諸將に分ち衡りに懸けて計り知る如く彼我の情勢其他を明かにしてから動く、是等の所謂ゆる迂直の計り事を知つた者は勝つので此が軍争の法と云ふのである。

12 軍政曰。言不相聞。故爲之金鼓。視不相見。故爲之旌旗。夫金鼓旌旗者。所以一人之耳目也。

軍中の政り事を記した古書に云ふてあるには軍中は多人数の事であるから言葉の號令では聞へないから鐘や大鼓を用ゆる、又た仕かたや何かでは視へないから旗指物を用ゆるとある。此等は全軍を一致させる所以である。

13 人既專一則勇者不得獨進。怯者不得獨退。此用衆之法也。

全軍既に一致すれば勇者でも一人進む事が出来ず憶病の者でも退く事は出来ない此れが衆多の人を用ゆるの法である。

14 故夜戰多火鼓。晝戰多旌旗。所以變人之耳目也。

其れであるから夜戦には松明の火と太鼓の數を多くして晝戦には

謀りごとを知らざる者は豫じめ交はるることを能はず山林險阻沮澤の形を知らざる者は軍を行はること能はず郷導を用ひざる者は

地の利を得る能はず
 故に兵は詐を以て立ち利を以て動く分合を以て變を爲す者也
 故に其疾さごと風如

15 三軍可奪氣。將軍可奪心。

【釋】 旗指物を多く爲るのは敵の耳目を變じ欺く手段である。

16 是故朝氣銳。晝氣惰。暮氣歸。善用兵者。避其銳氣。擊其惰歸。此治氣者也。

【釋】 人の氣は朝は鋭く晝は惰り日暮には勞れ歸り度なるのである、其れ故に善く兵を用ゆる者は其の銳氣を避けて惰り歸る時を撃つのである此れを氣を治めるといふのである。

17 以治待亂。以靜待譁。此治心者也。

【釋】 治まるを以て亂れるを伐ち靜かなるを以て譁しきを討つ之を心を

く其徐かなることを林の如し
 如し侵掠火の如く動かざることを山の如し
 難きこと陰るが如く動くことと雷震の如し
 郷を掠むる

治めるの法と云ふのである。

18 以近待遠。以佚待勞。以飽待飢。此治力者也。

【釋】 味方は近く行て敵の遠く来るを待ち、佚きを以て疲勞した敵を攻め兵糧を十分にして置いて敵の飢へた者を討つ之を力を治めると云ふのである。

19 無邀正正之旗。勿擊堂堂之陳。此治變者也。

【釋】 正々堂々として軍容の整ひたる敵と戦ふてはならない此れは變を治むると云ふものである。

20 故用兵之法。高陵勿向。背丘勿逆。佯北勿從。

には衆を分ち地を廓むるには利を分ち權を懸て動く先迂直之計りごとを知る者と勝つ此れ軍争の法也、

銳卒勿攻。餌兵勿食。歸師勿遏。圍師必闕。窮寇勿追。此用兵之法也。

戰の仕方は高い岡に在る敵に向つてはならない、丘を後にして居る敵に掛つてはならない、伴りて北ける敵を追撃してはならない、精銳の敵に對しては攻めてはならない、餌と見たらば其手に乗るな、本國へ歸るを急ぎて引上げる敵を遏る事を爲るな、敵を包圍すれば必ず一方を明けて置け、窮寇即ち必死の敵には迫るな此等を用兵の法と云ふのである。

軍政に曰く言相聞へ不故に之れが金鼓を爲す視るに相見へ不故に之れが旌旗を爲す夫れ金鼓旌旗は人之耳目を一ぱらにする所以也。

人既に專一なるときは勇者獨り進むことを得不怯者獨り退くことを得不此れ衆を用ゆる之法也、

故に夜の戦ひは火鼓多し晝の戦ひには旌旗多し人の耳目變ずる所以なり、

三軍は氣を奪ふ可し將軍は心を奪ふ可し、

是故に朝の氣は銳晝の氣は惰暮の氣は歸る善く兵を用ゆる者は其銳氣を避て其情り歸るを撃つ此氣を治むる者也、

治を以て亂を待ち靜を以て譁を待つは此れ心を治むる者也、

近を以て遠を待つ、佚を以て勞を待ち、飽を以て飢を待つは、之れ力を治むる者也。

正正之旗に邀ふこと無かれ、堂堂之陣を撃つこと勿れ、此れ變を治むる者也。

故に兵を用ゆる之法、高陵に向ふこと勿れ、丘を背にして逆ふること勿れ、伴り北るを従ふこと勿れ、銳卒を攻むること勿れ、餌兵を食むこと勿れ、歸る帥を遏むること勿れ、師を圍むときは必ず闕く窮寇は迫ること勿れ、此れ兵を用ゆる之法也。

九變第八

九變第八

孫子曰く凡そ兵を用ゆる之法、將命を君に受軍を合せ衆を聚む、

圯地は舍すること無く、衢地は交わりを合せ絶

此の篇は兵の常法なる九種の變化を説くのである。

孫子曰。凡用兵之法。將受命於君。合軍聚衆。

本文は軍争篇の初めの文と同一なれば別に説かない。

圯地無舍。衢地合交。絶地無留。圍地則謀。死地則戰。

圯地即ち低いくづれた所には舍營するな、市街地は戰を避けて他の外交等に利用せよ、後へも先きへも絶ち切られたような所へ留りてはならない、圍まれて出る事の出来ぬ様な所は善く謀りて置け、どうしても敗北して死ぬ様な所では戰つて切り抜ける。

途有所不由。軍有所不擊。城有所不攻。地

地は留まる
地は無れ圍
地は則ち
謀り死地は
則ち戦ふ
途に由ら
る所有り軍
に撃たざる
所有り城に
攻めざる所
有り地に争

有所不爭。君命有所不受。

行軍の道筋でも通ふるべき路と行く可らざる途とある、敵にしても撃可きと撃つ可らざるとがある、城とても必らず攻めると云ふ事計りではない、地とても取つて善き時と取らないで善い時とある、君主の命令でも受け用いない場合がある。

故將通於九變之利者。知用兵矣。將不通九變之利。雖知地形不能得地之利矣。

大將にして是等九變の理に通曉する者は善く兵を用ゆる事を得るか此の理に通ぜざる者は地理形勢を知りても地の利を得る事は出来ない

治兵不知九變之術。雖知五利不能得人

之用矣。

兵を治めるにも九變の術を知つて居なければ假令前に言ふた五箇の利害を知つて居ても兵を運用する事は不可能である。

是故智者之慮。必雜於利害。

其所で智者は事を慮り行ふに利害とも雜へ用ゆるか智の無いものは利のみを視て居るから失敗するのである。

雜於利而務可信也

利害を雜へて慮り務めて置くから局正の變化如何に拘らず計畫を伸ばす事が出来るのである、信は伸の古家である。

雜於害而患可解也。

は不る所有
り君命受け
不所有り、
故に將九變
之利に通ず
る者は兵を
用ゆること
を知る將九
變之利に通
ぜ不れ者地
形を知ると

雖も地の利を得ること能はず、能はず、兵を治むるに九變之術を知らずれば五利を知ると雖ども人之用を得ること能はず、

利のみを見ず害も雑へて慮り掛るから災難が起つても解く事が出来るのである。

是故屈諸侯者以害役諸侯者以業。趨諸侯者以利。

隣國其他關係國をして敵を助ける事の出来ない様に屈せしめるには彼等に害のある事を以てする、而して後ち彼等を吾思ふ儘に使役するのである、又た彼等をして吾思ふ所へ趨かしめようと爲るには利を以て誘ふのである。

故用兵之法。無恃其不來。恃吾有以待之。無恃其不攻。恃吾有所不可攻也。

戦争の法は敵の攻め来らざるを恃むてはならない、敵が来る来ら

是の故に智者之慮はかりは必ず利害を雑ゆ、

利に雑へ務め信べし、

害を雑へて患へ解く可し、

10

ざるに拘はらず吾は十分の備を爲し置くを恃みとするのである。

故將有五危。必死可殺。必生可虜。忿速可侮。廉潔可辱。愛民可煩。

大將として心得可き五ツの危い事がある、其れは死ぬ事を何とも思はぬ者は無益の討死をする、又た命を惜む者は虜と爲り易い、其れから敵方で忿り易い性質のものは侮辱を興へて怒らせるが善い、廉潔な者には耻辱を興へ、仁心深く國民を愛する者に對しては其民の煩ひ苦しむ様な事を仕掛けるのである。

凡此五者。將之過也。用兵之災也。覆軍殺將。必以五危。不可不察也。

以上五つの者は大將たる者の過失となるもので兵を用ゆるの災で

ある。一軍全滅して大將までも討死すると云ふ如きは必ず此五危に基くのであるから善く考察爲なければならぬ事である。

孫子卷之上終

是故に諸侯を屈する者は害を以てす諸侯を役する者業を以てす諸侯を趨しむる者は利を以てす、

故に兵を用ゆる之法其來らざるを待むこと無れ吾が以て之れを待つこと有を待む其攻らざるを待むこと無し吾が攻む可からざる所る有るを待む、

故に將に五危有り必死殺す可し必生虜にす可し忿て速かなるは侮る可し廉潔は辱しむ可し民を愛するは煩はす可し、
凡そ此の五の者は將之過ち也兵を用ゆる之災わい也軍を覆へし將を殺すこと必ず五危を以てす察せ不ばある可ら不、

孫子卷の下
 行軍第九
 孫子曰凡
 そ軍を處
 くに敵を相
 る、
 山を絶り谷
 に依り生を
 視て高きに

孫子卷下

行軍第九

行軍とは軍をヤルと讀む此篇は行軍に關して陣地の撰定斥候等の事を説いたのである。

孫子曰凡處軍相敵。

凡べて軍を置き陳取りをするには。彼我の利害得失を相度りて見なければならぬ。

絶山依谷。視生處高。戰隆無登。此處山之軍也。

處^がれ、隆^{たか}に戰^たふて登^{のぼ}る^{こと}無^なか^る也^{なり}、
 此^これ山^{やま}に處^{しよ}する^之軍^{ぐん}也^{なり}、
 水^{みづ}を絶^{わた}らば^必ず水^{みづ}に遠^{とほ}ざ^かる、
 客^{かく}水^{すい}を絶^{わた}つ

先づ陣を取るには、山を絶り越へて其山を後に當て敵に掛りよき様にし谷に依りて飲料水や馬糧用の草を得るの便宜を計り草木のある所を撰み其等を利用して風雨を避け又た燃料を得るに便利なる様にし、又たは高地を占めて先づ形勢を制するのであるソレから又隆い處にある敵に對して攻め登りてはならない、此の三ヶ條は山に依て軍を處するの心得である、生とは草木の事を云ふのである。

絶⁵水必遠⁵水。

河や川を渡り越へて陣を取るには必ず其の岸を遠く離れて陣を取らなければイケナイ其れは後軍の續いて渡るに便宜を與ふるのみならず敵に掛られた時に進退の便を得る爲めである。

客⁶絶⁶水而來。勿⁶迎⁶之於水内。令⁶半渡⁶而擊⁶之利⁶。

て來^{きた}らば之^これを水^{すい}内に^に迎^{むか}ふること^を勿^なかれ半^{なか}ば渡^{わた}ら^しめ^て之^これを擊^うてば利^りあり、
 戰^{たた}はん^と欲^{ほつ}する^者は水^{みづ}に附^かづいて^客を迎^{むか}ふる

敵が河を渡つて攻め來る時に其れを河中に迎へて戦つてはならない半分渡つた頃を見計ひ攻め掛れば勝利を得る。

欲⁷戰⁷者。無⁷附⁷於水⁷而迎⁷客⁷。

河を渡り來る敵と戦ふと思ふならば河岸に附いて敵を迎へてはならない、川岸より相當に離れて戦ふべき場所を取つて置くが善い。

視⁸生處⁸高。無⁸迎⁸水流⁸。此處⁸水上⁸之軍⁸也。

草木の有る所を見立て、高地を占めて陣を構へ又た河川の下流に處ら無い様に爲なければならぬ、此等が水上即ち水のホトリに處する軍法である。

絶⁹斥澤⁹。唯⁹亟⁹去⁹無⁹留⁹。

斥とは海邊などの鹽氣の有る地を云ひ、澤とは水溜りの箇所を云

こと無れ、
 生を視て高
 きに處れ水
 の流れを迎
 ふること無
 れ此れ水上
 に處する之
 軍也、
 斥澤を絶ら
 ば惟だ亟か

ふのである、即ち海邊の砂地の所や、湖水近所の濕氣のある土地は軍馬の駆け引にも勝手が悪く且つ衛生の上にも宜くないから斯る場所は速かに去るを可とするのである。

10 若交軍於斥澤之中。必依水草而背衆樹。此處汗澤之軍也。

若し前に云ふた斥澤の地で戦さを爲るときは水草の有る所を撰び森林を背に當て、備へを立てるのである、此れが沼地や海邊に於ける軍を處するの法である。

11 平陸處易。右背高。前死後生。此處平陸之軍也。

平地の軍にはタイラにして足場善き場所を撰み山でも丘でも高い

に去つて留
 なること無
 れ、
 若し軍に斥
 澤之中に交
 わらば必ず
 水草に依て
 衆樹を背る
 にせよ此れ
 斥澤に處す
 る之軍也、

に去つて留
 なること無
 れ、

12 凡四軍之利。黃帝之所以勝四帝也。

所あれば其れを右後に控へ草木の無い土地を前に當て草木の生へて居る所を後方にするのである此れが平地に於ける軍を處するの法である。

13 凡軍好高而惡下。貴陽而賤陰。養生處實。軍無百疾。是謂必勝。

凡べて陣を置くには高地を好しとし、低地を惡しとす、又た東南に向ひ山の表てに居るを貴び西北に向ひ山の陰に居るを賤しみ馬糧燃料に乏しからざるを撰んで堅實なる地形を占めて居り而して軍中に疾病の無いように爲れば必ず勝つのである。

11 平陸には易に處る高さ死を前にし生を後にす此平陸に處る之軍也、
 12 凡そ四軍之利は黃帝之四帝に勝つ

14 丘陵隄防。必處其陽而右背之。

岡の堤防の有る所は必ず其れを右背に當て、東南方に陣すべきである。

15 此兵之利。地之助也。

此は兵を用ゆるに利益の有る様地勢の助けを利用するのである。

16 上雨水沫至。欲涉者。待其定也。

河の上流に雨が降つた時は水沫が流れて来るものである斯る時は水勢如何に變ずるかも計り難いから河を渡ろうとするならば暫く水勢の定るを待つ可きである。

17 凡地有絶澗。天井。天牢。天羅。天陷。天隙。天隙。必亟

所以也、
 13 凡そ軍高きを好みて下を惡む陽を貴とんで陰を賤しむ生を養ふて實に處る軍に百の疾ひ無し是れを必勝と謂ふ

去之。勿近也。

絶澗とは左右は切り立ちたる山にて中を水の流れるもの、天井とは天の爲せる井戸と云ふ事にて四方高く水の落ち合ひ溜りたる所、天牢とは恰かも牢獄の如く深山に圍まれ四邊險はしく草木蔽ひ晝猶ほ暗く出入困難なる所、天羅とは葛蔓林木茂り道入り亂れ弓矢も用を爲さぬ所、天然の網の内に入りたると同じ様なる不自由の地、天陷とは天然の陷し穴にて沼古田の跡にて泥深く人馬の足立たぬ場所なり、天隙とは天然の割れ目と云ふ事にて途上所々堀り切りありて行き惜き所を云ふのである、凡そ地上には是れ等のものがあると云ふのである。

18 吾遠之敵近之。吾迎之敵背之。

吾軍は以上の如き危険の地點を遠ざかりて敵をして之れに近づけしめ、吾れは之れを前に迎へるようにして敵には之を背にして備へさせる様に爲なければならぬ。

14 丘陵隄防必
 らず其の陽
 に處て之れ
 を右背にす
 此れ兵之利
 地之助け也
 15
 16 上雨ふりて
 水沫だち至
 らば涉らん

19 軍旁有險阻。潢井。蒺藜。林木。藪薈者。必謹覆
 索之。此伏姦之所也。

軍の行く途上險阻の地、池坑、蒺藜、林及草木の藪薈と茂りたる所があつたら其れは伏勢を置くに適當の所であるから必ず慎重に搜索して敵の策に落ちない様に爲なければならぬ、是れまでは軍を置く場所を云ふのである。

20 敵近而靜者。恃其險也。

是れより以下は敵を相るの法を説き示すのである、味方攻め寄せても敵靜かに落つきて居るのは險阻要害を恃みにして安心して居るのである。

21 遠而挑戰者。欲人之進也。

と欲する者
 は其の定ま
 るを待て、

22 其所居易者利也。

敵は遠くに居乍ら吾れに對して戰を挑み種々の方法を以て吾れを誘ふものは吾が軍の進むを待つて何事か策を施して吾れを敗らんとするものである。

23 衆樹動者來也。衆草障者疑也。鳥起者伏也。獸駭者覆也。

敵勢を展望するに方りて澤山の樹木が動いて見へるのは進み來るのである、草を多く結び物掛けを作りたり折りて目印しらく見せたりするは伏兵でもありはせぬかと吾を疑はしむるのである、鳥の何心なく

17 凡そ地に絶
 澗天井天牢
 天羅天陷天
 隙有り必ず
 亟やかに之
 れを去て近
 づくこと勿
 れ、

18 吾は之れに遠ざかり敵は之れに近づけしめ、吾れは之れを迎へ敵は之れを背にせしむ、
 19 軍の旁らに險阻潰井兼

平らに飛び行くものが不意に高く飛び上るは伏勢の在るので、鹿、猪などが駭き飛び出すのは横合に敵が掩れて居るのである。

24 塵高而銳者。車來也。卑而廣者。徒來也。散而條達者。樵採也。少而往來者。營軍也。

塵埃高く鋭く杉なりに揚るのは車軍が来るのである其れが卑く幅廣く揚るの歩兵が来るので、方々に散りて筋立ちて揚るの燃料薪材等を取るべく往來するのである又た少くしてアチコチ往來するのは騎兵が陣地を偵察すべく奔走するのである。

25 辭卑而益備者。進也。辭強而進驅者。退也。

敵陣より使者來るに其辭卑下して丁寧であつて而も益々備を嚴重にするのは進み來るのであつて其の使者の口上が強みを含みて押柄で責め掛ける風に見へるものは其實退くのである。

葭林木翳蒼有る者は必ず謹しんで之れを覆索せよ此れ伏姦之所也、
 20 敵近ふして靜かなる者は其の險を恃むなり

25 輕車先出。居其側者陳也。無約而請和者。謀也。

車戰に用ゆる輕車を先づ出して其の左右の側に置くものは陣立てをして戰はんとするもので、約即ち何等困難して釣りたる形勢も無きに和睦を申込み來るのは吾に油斷を爲せる爲めか或は他に方策あつて戰期を延ばすべく爲めにするのである、約はつまりと讀み困難の極と云ふ儀に解すべきである。

26 奔走而陳兵者。期也。半進半退者。誘也。

傳騎傳令使など奔走して陣立を整ふるの後は後詰の加はるか又は内應の約成りて決戰の期近づきたる爲めである、半進半退態と軍形の亂れたる如く見せるものは斯くして吾を誘ふのである。

27 仗而立者。飢也。汲而先飲者。渴也。見利而不

進者。勞也。

敵兵が鐘などを枝にして立ち乍ら休み居るのは飢て居るので水を汲みに出たものが吾れ先づ一番に飲むのは渴へて居るのである勝利を見乍ら進まないのは疲勞して居るからである。

鳥集者。虚也。夜呼者。恐也。軍擾者。將不重也。

敵陣又は敵城に鳥の集り飛ぶは虚勢而已にて人數の居ないのである、夜る呼び合ふ聲の聞ゆるのは敵兵の心臆して恐るゝ所あるからである、軍令縮らず軍中の騷擾するのは敵將の威嚴軽く號令行はれざるのである。

旌旗動者。亂也。吏怒者。倦也。

旗印などの動き紊るゝのは敵軍の隊伍整はぬから大將の下役なる者達の怒るのは士卒が疲れ倦んで云ふ事を聽かないからである吏とは將の下に屬する官人の事である。

遠くして戦ひを挑む者は人の進むを欲するなり、其居る所易なる者は利也、衆樹動く者

殺馬肉食者。軍無糧也。懸甌不返其舍者。窮寇也。

軍中要用なるべき馬をも殺して其肉を食するのは糧食の盡きた證據である、甌即ち飯を焚く釜を木の枝などに懸け別に甌も作らず元の陣舎にも返らぬのは、必死を窮はめたるものである。

諄諄論論。徐與人言者。失衆也。

諄々コマノ、論々ヒソノ、と徐かに此處彼所に集り語り合ふのは大將が衆人の心即ち士卒の人望を失ひたる證據である。

數賞者。窘也。數罰者。困也。

譯もなく數次士卒を賞するのは既に勢盡き士卒の心一致せず兎もすれば部下の心離れんとする故心苦しく賞を以て其心を維ぐるので、又

は來る也衆草障へ多きは疑はしむる也鳥の起者伏也獸也、駭く者は覆塵高ふして鈍き者は車來る也卑く

して廣き者
徒にて來る
也散じて條
達する者は
樵採する也
少なくして
往來する者
は軍を營む
也、
辭卑ふし

た矢たらに罰するのは士卒疲勞して命を用いざる爲め困しむの結果罰を以て部下をおどし勵まさんと爲るのである。

33 先暴而後畏其衆者。不精之至也。

先きに暴虐に士卒を扱ひ乍ら後で部下の衆を畏れるのは兵法に精しくないから斯ふ云ふ事に至るのである。

34 來委謝者。欲休息也。

未だ勝敗も決せざるに人質などを委れ來りて謝するのは暫く軍馬を憩め時機を待つて再び戦はんとするのである。

35 兵怒而相迎。久而不合。又不相去。必謹察之。

敵の軍氣怒るが如く激しく攻め掛ける體であり乍ら吾れ之れを迎へ戦んとするに打ちも掛らず相對して久く合戦もせず又た引き上げも爲ないのは何か譯があるのであるから謹で慎重に狀況を偵察仕なければならぬ。

て備へを益
す者進む也
辭強ふして
進み驅る者
は退く也、
輕車先づ出
で其の側ら
に居る者陳
する也約無
くして和を

36 兵非貴益多。惟無武進。足以併力。料敵取人而已。

兵數の多きを益すを貴ぶのでもなく惟だ武く進む計りを可とするのでもない要は全軍一致し其力を併せ敵狀を料り察して勝を敵に取るのである。

37 夫惟無慮而易敵者。必擒於人。

惟だ深く思慮考察せずして敵を易んじ侮る者は敵の計略に陥るか敗けるかして必ず擒となるのである。

38 卒未親附。而罰之。則不服。不服則難用也。卒已親附。而罰不行。則不可用也。

請ふ者は謀る也、
 奔走して兵を陳する者は期する也、
 半ば進む半ば退く者は誘ひく也、
 杖ついで立つ者は飢れた

士卒の心未だ已に親み附かざる中に猥りに罰を與へては部下は心服しない、心服しない部下は使用し難いのである、士卒共が既に親しみ乍ら恩のみ用いて罰を行はざる時は是れも亦用ゆ可からざるものだ。

故令之以文。齊之以武。是謂必取。

であるから、此れを下知するに文徳即ち仁愛恩徳を以てし、之れを戒め齊ふるに武徳即ち刑罰を以てして部下を心服せしめ自己の意の儘に働かすのである是れが先づ必らず勝を取るの道である。

令素行。以教其民。則民服。

命令平素より行はれて居て其れで民を教へ練つて置けば民は命令に服するのである。

令不素行。以教其民。則民不服。

命令が平素行はれずして急に其れを以て兵に教へたとて兵の心は

る也汲で先

服すものではない。

令素行者。與衆相得也。

命令平素より行はれれば兵を服せしめて居るものは一軍の衆と與に相一致して如何なる場合にも勝を得る事が出来るのである。

不者勞する也

鳥の集る者は虚也夜呼はる者は恐る、也軍擾る、者は將を重ぜ不る也

旌旗動く者は亂る也吏怒る者は倦む也

馬を殺して肉食する者軍に糧無き也飯を懸て其舍に返ら不る者窮寇也

諄諄諭諭として徐かに人與言いふ者衆を失なへる也、

數々賞する者は窘なむ也數々罰する者困する也、

先に暴にして後に其の衆を畏る者精しからざる之至り也、

來つて委謝する者休息せんと欲する也、

兵怒りて相迎ふ久しふして合せ不又相去不ば必ず謹んで之れを察せよ

兵益々多きを貴むに非ず唯武く進むこと無し以て力を併するに足れり敵を料つて人を取る而已、

夫れ唯慮はかり無くして敵を易どる者は必ず人に擒はる、

卒未だ親附せず之れを罰すれば則ち服せ不服せるときは用ひ難し卒

已に親附して罰行はるときは用ひ可からず、

故に之れを令するに文を以てし之れを齊ふするに武を以てす是れを必

取と謂ふ、

令素より行はれて以て其の民を教ゆるときは民服す、

令素より行はれ不して以て其の民を教ゆるときは民服せず、

地形第十 1
 孫子曰：地有通者，有掛者，有支者，有險者，有遠者。我以此往，彼可以來。曰：通。通形者，先居高陽，利糧道，以戰則利。

地形第十

此の篇は軍に關する地形を説いたのである。

孫子曰。地形有通者。有掛者。有支者。有險者。有遠者。

地形に四方八方自在に通ずるもの、物の釣り掛りたる形ちに似たるもの、支へられた形ちのもの、隘きもの、險しきもの及遠ほきもの、の六ツがある。

我可以往。彼可以來。曰通。通形者。先居高陽。利糧道。以戰則利。

味方よりも敵よりも往來するに便利の地を通と云ふので此の通形の地に於ては先きに山又は丘を背るに受けた高地を占めて糧道を絶たれ

可く彼以て來る可きを通と曰ふ。通の形ち者先づ高陽に居て以て戰ふときは則ち利あり、
 請方 2
 以て往く可

ぬ様にして戦へば勝利が得られる。

可以往。難以返。曰掛。掛形者。敵無備。出而勝之。敵若有備。出而不勝。難以返。不利。

進み往く事は出来るが軍を返す事が出来悪い地を掛形の地と云ふので此の地形に於ては敵が備へ無ければ勝つ事が出来るが敵に備へが有れば軍を出しても勝つ事は出来ない、勝つ事の出来ない上に引上げ難いのであるから敗けるのは必然である。

我出而不利。彼出而不利。曰支。支形者。敵雖利我。我無出也。引而去之。令敵半出。而擊之利。

敵が來ても味方が往てもドチラも勝利を得る事の出来ない地を支

し以て返り
 難きを掛と
 曰ふ掛の形
 ち者敵備へ
 無ければ出
 で之れに勝
 つ敵若し備
 へ有らば出
 て勝た不以
 て返り難さ
 は利あら不

形と云ふのである斯様の處では假令敵の仕方が我に利在りと認めても出て戦つてはならない、我は引上げて其所を去り敵をして追撃せしめ彼れが半ば軍を出した所を返し撃てば勝利を得るのである。

5 隘形者我先居之必盈之以待敵。若敵先居之盈而勿從不盈而從之。

隘形として口狭く中廣き地に於ては味方先きに此の地を占め居りしならば必らず其の隘き口の所を盈て守り敵を待つべし、若し敵が先きに占領して居て其の入口を盈て防ぎ居るならば攻めてはならない併し其入口の隘き所を守つて居らなければ攻め入るが可い。

6 險形者我先居之必居高陽以待敵。若敵先居之引而去之勿從也。

險しい場所は我先きに此れを占領したならば必ず高見の山か岡を

請の 3

我出て利あ
 ら不彼出て
 利あら不
 を支と曰ふ
 支の形ち者
 敵我を利す
 と雖ども我
 出ると無れ
 引て之れを
 去る敵をし

後右に當つた所に居て敵を待て。若し敵が先きに居たならば引き上げて戦ふを避けべきである。

7 遠形者勢均難以挑戰。戰而不利。

遠形即ち彼我の距離遠き地は相互の勢均しければ戰を挑む事は出来なからず此方より仕掛ては不利である敵の掛るのを待ち俟を以て勞を伐つるの策を取るべしである。

8 凡六者地之道也。將之至任不可不察也。

以上六ツの者は凡べて自然に定りたる地形の道理である大將の至るべき任務を有するものとして是非とも察せなければならぬ事である。

9 故兵有走者有弛者有陷者有崩者有亂者有北者凡此六者非天地之災將之過也。

て半ば出さ
令之れを撃
てば利あり

隘の形ち者
我先づ之れ
居らば必ず
之れに盈ば
以て敵を待
て若し敵先
づ之れに居

兵には心億して敗け走るものと、心弛るみて役に立たぬ者と、心足らずして敵の計り事に陥る者と、分れ／＼に崩れ逃げるものと、右往左往に亂れ散る者と敵に後を見せて北ける者がある、此等六つのものは天地の災より生ずるのではなく大將たる者の不覺の過である。

夫勢均以一撃十日走。

兵の剛憶糧食の準備將の智能等總ての勢ひ相均しきも敵に對し小勢を以て攻撃すれば敗軍するのが必然である如斯きを走と云ふのである

卒強吏弱曰弛。

部下豪強にして將吏懦弱なるときは軍規の弛るむものである。此れを弛と云ふ

吏強卒弱曰陷。

將吏勇剛にして士卒懦弱なるときは將の心苛ち其れが爲め氣をあ

り盈ば從ふ
こと勿れ盈
不ば之れを
從へ、

險の形ち者
我先づ之れ
に居らば必
ず高陽に居
て以て敵を
待て若し敵

せりて終には死地に陥る場合に立ち至るのである。之を陷と云ふ。

大吏怒而不服遇敵懟而自戰將不知其能
曰崩。

部隊に長たる者大將の仕方を怒り心服せず敵に遇ふて戰ふに大將を懟み居る故其命令を用ひず各自勝手の戰を爲る此れは大將たる者が其の能不能を知らないからである斯の如く部下が勝手に行動すれば軍の統一を缺くから崩れるのである。之を崩と云ふ。

將弱不嚴。教道不明。吏卒無常。陳兵縱橫
曰亂。

將柔弱にして下之を侮り法令嚴肅を缺き教育不十分にして部下軍規に明かならず將卒の擔任常に變動多く、備の立て方の埒もなきを亂と云ふのである。之を亂と云ふ。

先づ之れに居らば引て之れを去れ従ふと勿れ

遠の形ち者勢ほひ均しければ以て戦ひを挑み難し戦ふて利あら不

15 將不能料敵。以少合衆以弱擊強兵無選鋒曰北。

大將無能にして敵を料り知る事が出来ず小勢を以て衆敵と戦ひ、弱兵を以て強敵を撃ちなどし且つ先鋒に適したものを用いないのは敗北するのである。之を北と云ふ。

16 凡此六者敗之道也。將之至任不可不察也。

此の六つの者は敗亡を招く道である將たる者は善く深く察しなればならない。

17 夫地形者兵之助也。料敵制勝計險阨遠近上將之道也。

地形は兵を用ゆるの助けとするので、敵を料り勝を取る爲めには

凡そ六の者は地之道也

將之至任察せ不ばある可から不、故に兵に走る者有り弛まる者有り陥る者有り崩る者有り

其の險不險、阨不阨又遠近に應じて計畫を立てなければならぬのが上將たる者の道である。

18 知此而用戦者必勝。不知此而用戦者必敗。

此の道理を知つて之れを戦ひに用ゆる者は必ず勝ち此の道理を知らないで戦へば必ず敗けるのである。

19 故戦道必勝。主曰無戦。必戦可也。戦道不勝。主曰必戦。無戦可也。

故に戦の道は必ず勝つと云ふ見込が立たば君主より戦ふなと云はれても戦ふて宜しい又た勝つ見込がなければ君主が戦へと云ふても戦はないで宜しい。

20 故進不求名。退不避罪。惟民是保。而利於主。

國之寶也。

【釋義】 であるから忠實なる大將は自己の名利も思はなければ罪も畏れな
い一意國民の爲め君主の利益の爲めになる様に心掛るのである斯くして
こそ國の寶と云はれるのである。

視²¹卒如嬰兒。故可與之赴深谿。視卒如愛
子。故可與之俱死。

【釋義】 部下の士卒を見る事赤子の如く慈しみ最愛の子供の如く慈しむか
ら大將の命と云へば如何なる危険の地へも趣き大將が死ねば俱に討死す
ると云ふ覺悟を爲さしめる事が出来るのである。

愛²²而不能令。厚而不能使。亂而不能治。譬
如驕子不可用也。

有^あり亂^{みだ}る者^{もの}有^あり北^{にや}る者^{もの}有^あり凡^{おほ}そ
此^{この}六^{もの}の者^{もの}は
天地^{てんち}之^の災^{わざ}わ
いに非^あらず將^{しやう}
之^の過^{あや}まち也^{なり}
夫^それ勢^{いきほ}ひ均^{ひと}
しく一^{いつ}を以^{もつ}
て十^{じゅう}を撃^うつ

を走^{はし}ると曰^い

卒^{そつ}強^{きよ}く吏^り弱^{じやく}
を弛^ちと曰^い

吏^り強^{きよ}く卒^{そつ}弱^{じやく}
を陷^{かん}と曰^い

大^{たい}吏^り怒^{いか}つて服^{ふく}
せ不^す敵^{てき}に遇^あふ

大^{たい}吏^り怒^{いか}つて服^{ふく}
せ不^す敵^{てき}に遇^あふ

【釋義】 愛する計りで法令に服せしめる事が出来ず厚遇する計りで使ふ事
が出来ず規律が亂れても治める事が出来なければ丁度吾儘つ子の様なも
ので用には立たないのである。

知²³吾卒之可以擊。而不知敵之不可擊。勝之
半也。知敵之可擊。而不知吾卒之不可以
擊。勝之半也。知敵之可擊。知吾卒之可以擊。
而不知地形之不可以戰。勝之半也。

【釋義】 吾が士卒の攻撃力あるを知つて敵の備が整ひ撃つに不利なる事を
知れば戦は半ば勝である、敵に攻撃すべき虚あるを知つて吾が士卒の攻
撃力なき事を知らないで戦ふ者は矢張り半ばの勝ちである、敵の虚を知
り吾が攻撃力あるを知るも地形の利不利を知らなければ是れ亦半分しか
勝たないのである。

て懃みて自ら戦ふ將其能を知らざるを崩と曰ふ、

24 故知兵者動而不迷。舉而不窮。
故に兵法に通じた大將は軍を動かすに當り少も迷はない兵を擧げ戦ふに臨み少しも窮せないのである。

將弱ふして

以上の如くであるから古語にも敵を知り味方を知れば勝ち天の時と地の利を知れば戦捷を全ふすると云ふて有るのである。

嚴なら不道を教ゆると明かなら不吏卒常無く兵を陳するに縦横するを亂と曰ふ、

將敵を料ること能は不少を以て衆を合し弱を以て強を撃ち兵選鋒無き

を北ると曰ふ、

14 凡そ此の六者は敗之道也將之至任察せ不んばある可からず、

15 夫れ地形者兵之助け也敵を料りて勝つとを制し險阨遠近を計るは上將之道也、

16 此れを知つて戦ひを用ゆる者は必ず勝ち此れを知らずして戦ひを用ゆれば必ず敗る、

17 故に戦ひの道は必ず勝たば主戦ふ無れと曰ふも必ず戦ふて可也戦ひの道は勝た不んば主必ず戦へと曰ふも戦ふ無して可也、

故に進んで名を求め不退いて罪を避け不唯民是れを保んじて主に利あり國之寶ら也、

卒を視ると嬰兒の如くす故に之れ與深谿に赴く可し卒を視ると愛子の如くす故に之れ與死を俱にす可し、

愛して令すると能はず厚ふして使ふと能はず亂して治むると能はず譬へば驕子の用ゆ可からざるが如し、

吾卒之以て撃つ可きを知り敵之撃つ可からざるを知らざるは勝ち之半ば也敵之撃つ可きことを知り吾卒之以て撃つ可からざるを知らざるは勝ち之半ば也敵撃つ可きことを知吾卒之以て撃つ可きことを知れども地形

之以て戦ふ可からざるを知らざれば勝ち之半ば也、

故に兵を知る者は動いて迷はず不舉げて窮せず、

故に曰く彼を知己れを知るときは勝ち乃ち殆うから不天を知り地を知るときは勝ち全かる可し、

九地第十一

前の地形篇には地に六の形ちあるを説いて此の篇には地に九の勢ひある事を説いたのである。

孫子曰。用兵之法有散地有輕地有爭地。有交地。有衢地。有重地。有圯地。有圍地。

九地第十一
孫子曰く兵を用ゆる之法散地有り

輕地有り争
地有り交地
有り衢地有
り重地有り
圯地有り圍
地有り死地
有り、
諸侯自から
其の地に戦
ふ者を散地
と爲、

有死地。

是れは九地の目錄である散地とは士卒の氣の散り易き所、輕地とは輕々しき心起る所、争地とは彼我ともに必要の地點にして先づ占取せんと争ふ所、交地とは彼我ともに往來し相互入れ交る所、衢地とは市街の事重地とは敵地深く入りたる所、圯地とは險阻の所、圍地とは四方取り圍まれたる所、死地とはグズ／＼仕て居れば全滅する所を云ふのである

諸侯自戰其地者爲散地。

我國内で戦へば士卒等の家近き爲め其方へ心引かれ氣が散るから散地と云ふのである。

入人之地而不深者爲輕地。

敵地に入ても未だ口元で行くも歸るも自由で士卒の決心輕き故輕地と云ふのである。

人之地に入
て深から不
る者を輕地
と爲、
我を得れば亦
利あり彼得
るも亦利あ
る者を争地
と爲、

我得亦利。彼得亦利者爲争地。

彼れ得れば勝利又た味方得れば勝利と云ふ地點を争地と云ふのである。

我可以往。彼可以來者爲交地。

敵も來れば味方も行き互に行き易く交錯する所を交地と云ふのである。

諸侯之地三屬。先至而得天下之衆者爲衢地。

第三國に屬して居て先きに行つた者の其所に集まつて居る各國の物資を得る事の出來る交易地の如きを衢地と云ふのである。

入人之地深背城邑多者爲重地。

我^わ以^んて往^ゆ可^く 6
 被^か以^んて來^きる
 可^べき者^{もの}を交^{かう}
 地^ちと爲^す、
 諸^{しよ}候^{こう}之^の地^ち三^{さん}
 屬^{ぞく}す先^まづ至^{いた}
 つて天^{てん}下^か之^の
 衆^{しゆ}を得^うる者^{もの}
 を衢^く地^ちと爲^す
 人^{ひと}之^の地^ちに入^い

敵地へ深く攻め入り其の城邑の多くを背後にした所は士卒の決心も重き故重地と云ふのである。

9 山林險阻沮澤。凡難行之道者。爲圯地。

山林や險阻の道や沼澤等凡て行き通ひ困難の所を圯地と云ふのである。

10 所由入者隘。所從歸者迂。彼寡可以擊吾之衆者。爲圍地。

這入る所が隘くて歸るには大廻りを爲なければならず而も敵の小勢を以て味方の大衆を撃つに利ある所を圍地と云ふのである。

11 疾戰則存。不疾戰則亡者。爲死地。

疾く決戦すれば勝つ事が出来るが躊躇して居ると全滅の不幸を見

ること深く
 して城邑を
 背にするの
 多き者を重
 地と爲す、
 山林險阻沮
 澤凡て行き
 難き之道者
 圯地と爲す、
 10

る所を死地と爲るのである。

12 是故散地則無戰。輕地則無止爭。地則無攻。交地則無絕。衢地則合交。重地則掠。圯地則行。圍地則謀。死地則戰。

であるから散地で戦つてはならない、輕地に止まつてはならない争地を敵に占領されたら其れを攻めてはならない、交地では敵に糧道を絶たれない様にせよ、衢地では第三國と交誼を結び好を通ぜよ重地では敵の物資を出來得る限り掠奪せよ、圯地は早く過ぎ行けよ、圍地では謀略を以て勝て、死地では致方ないから、必死と覺悟して戦へ。

13 古之善用兵者。能使敵人前後不相及。衆寡不相恃。貴賤不相救。上下不相收。卒離

由て入る所
 ろの者隘く
 従つて歸る
 所の者迂り
 彼寡にして
 以て吾衆を
 撃つ可き者
 と圍地と爲
 疾く戦かへ
 ば存し疾く

謂方 11

而不集。兵合而不齋。

古へから兵學に通じた者は敵をして先陣は後陣に手が届かず、大小各部隊をして連絡を取らしめず、將卒相救ふの違あらしめず上下の心を離散せしめ兵伍を亂れ離して一所に集めずして接戦に際し敵兵をして働作を齊一ならしめざる様に爲る。

合於利而動。不合於利而止。

勝利を得べき道理に合すれば軍を動かさし然らざれば動かさない。

敢問敵衆整而將來。待之若何。

敢て御尋ねするが敵の大軍整々として將に攻め來らんと爲る時我之れを待ち受けて勝つには如何すれば宜しいのである乎。

曰先奪其所愛則得矣。

戦は不れば
 亡ぶ者を死
 地と爲す

謂方 12

是故に散地
 は則ち戦
 ふこと無れ
 輕地は則ち
 ち止まると
 と無れ争地
 は則ち攻

左様其時は先づ何でも敵の大切に爲るもの即ち愛するものを取れば勝つ事が出来る。

兵之情主速。乘人之不及。由不虞之道。攻其所不戒也。

兵の情即ち合戦の心とする所は速いのを主とするので敵の及ばない其虚に乗じ敵の思ひ寄りぬ道より攻め入り又は其の用心せざる所を攻めるのである。

凡爲客之道。深入則專。主人不克。

凡べて客戦として敵國へ攻め入る時は敵地深く入れば入る程將士の心專一と爲りて主人即ち敵の方は克つ事が出来なくなるのである。

掠於饒野。三軍足食。謹養而勿勞。并氣積。

れて集まら
不兵合して
齊は不ら使
む

利於合して
動き利に合
せ不して止
む

敢て問ふ敵
15

24 令發之日。士卒坐者涕霑襟。偃臥者涕交頤。
投之無所往。諸劔之勇也。

大將より愈々死生存亡此の一戦にありとの命令下れば士卒は萬感極まつて涕を流し吾が命も今日限り萬死を出で、一生を得るか尸を義に暴らすのかと覺悟の膽を固める、是の決死の者を死ぬより外往き所の無い所へ投じるのであるから其の勇氣は彼の戦國時代の專諸や春秋の時分の曹劌以上である。

25 故善用兵者。譬如率然。率然者。常山之蛇也。擊其首則尾至。擊其尾則首至。擊其中則首尾俱至。

戦を上手にするものは丁度率然と云ふ彼の常山に住んで居る蛇の様である其の首を打てば尾で防ぎ其尾を打てば首で禦ぎ其の胴を撃てば首と尾を一諸にして守る。

26 敢問可使如率然乎。曰可。夫吳人與越人相惡也。當其同舟濟而遇風。其相救也。如左右手。

敢て問ふ左様に甘く率然の如くせしむる事が出来ませうか、出来るとも夫の吳國の人と越國の人とは敵同士として仲が悪い、けれども同じ舟に乗つて河を濟るとき難船すれば平常の事は忘れて一諸に成つて急を救ふではないか。

27 是故方馬埋輪。未足恃也。齊勇若一。政之

衆整ふて將
に來らんと
す之れを待
こと如何
曰く先づ其
の愛する所
を奪へば則
ち得、
兵之情は速
やかなるを

道也。

【釋義】 であるから馬を並べたり車を埋づめどりして守る事も恃むに及ばない仲の悪い吳越の人が諸共に船を救ふ時の如く力を併せ勇氣を一致せしむるのが軍政の道である。

剛柔皆得。地之理也。

【釋義】 山阪丘陵等の如き剛地や海川沮洳の如き柔地を皆な上手に利用するのが地の理である。

故善用兵者。攜手若使一人。不得已也。

【釋義】 人の和と地の利とを併せ用ゆるから自分の手を以て一人を使用する如く軍を動かす事が出来る此れは將士をして已むを得ず斯く在らしむる様に爲るのである。

將軍之事。靜以幽。正以治。能愚士卒之耳目。

主とす人之
及ばざるに
乗じ不虞之
道に由り其
の戒めざる
所を攻む、
凡そ客爲る
之道は深く
入るときは
専らなり主

使之無知。

【釋義】 將軍の爲る事と云ふものは靜かに幽かに外より伺ひ見る事も知る事も出来ず規律端正に治め整へ號令を犯さしめず、能く部下の耳や目を愚かに暗まして此等をして自分の胸中を計り知らざらしめるのである。

易其事。革其謀。使人無識。易其居。迂其途。

使人不得慮。

【釋義】 事に臨んで其の用ゆる處を易へ予謀を革め敵をして識らしめず、陳地を易へ道途を迂遠の様に思はし敵をして慮り得ざらしめるのである。

帥與之期。如登高而去其梯。

【釋義】 合戦の期に臨んで兵を配る事は高い所へ登らして置いて梯を下した様にするソレハ進退窮まり必死の念を起さしめる爲めである。

人克不、
饒野に掠す
めて三軍食
を足養ひを
謹しみて勞
すること勿
れ氣を并せ
力を積で兵
の計謀を運
らし測る可

からざることを爲し之れを往く所無きに投ぜば死も且北げ不、
【論カ】 20
 死すること焉を得ん士人力を盡す兵士甚は

³³ 帥與之深入諸侯之地。而發其機。若驅群羊。驅而往驅而來。莫知所之。

【釋】 深く敵地に入りて戰機を發表するや部下を率ゆること牧者が羊の群を驅使する如く自分の思ふ儘に進退して毫も豫知せしめない。

³⁴ 聚三軍之衆。投之於險。此將軍之事也。

【釋】 三軍の大衆を危險の地に投じ彼等をして危險を感じしめず安心して命に従はしむるのが將軍の任務である。

³⁵ 九地之變。屈伸之利。人情之理。不可不察也。

【釋】 九地の變化之れに應ずる屈伸の利害及び此れに隨ふ人情の理など深く察せなければならぬ。

³⁶ 凡爲客之道。深則專。淺則散。

だ陷いとすは則ち懼れ不往く所無きときは則ち固く入ること深きときは則ち拘はる已むことを得ずして鬪ふ、

³⁷ 去國越境而師者。絕地也。

【釋】 凡べて敵地に攻め入る客軍の道理としては深入すれば味方の心事一となるが未だ其の淺い時は味方の心は散り勝ちのものである。

³⁸ 四通者。衢地也。入深者。重地也。入淺者。輕地也。背固前隘者。圍地也。無所往者。死地也。

【釋】 四方に通ずるのは衢地で敵地深く侵入するものは重地で入ること淺きものは輕地で背る險しく前方隘いものは圍地である前後左右往く事の出来ない所は死地である。

³⁹ 是故散地吾將一其志。輕地吾將使之屬。爭

を霑ほし、偃臥する者は、涙願ひに交る之れを往く所無きに投ず諸劇之勇也、
 故に善兵を用ゆる者は、譬へば卒然

【釋義】 霸王の軍と云へば必らず兵略に長じた軍であるから、總ての計畫が完備して居る、其れであるから假令大國の敵を討つとしても敵は兵力を集中する事が出来ず、又た敵の同盟國も敵に合する事が出来ない。

44 是故不_レ爭_二天下_一交。不_レ養_二天下之權_一信_二己之私_一。威加_二於敵_一。故其城可_レ拔。其國可_レ隳。

【釋義】 隨つて各國の交誼を得べく敵と手段を争ふ必要もなく諸外國自然と我國威に服すゆゑ殊更に權力を養ふにも及ばず自己一國の兵威を以て敵國に加へる斯く總ての事思ふ儘になるから城も拔く事が出来れば國も隳す事も出来るのである。

45 施_二無法之賞_一。懸_二無政之令_一。犯_二三軍之衆_一。若_レ使_二一人_一。
 【釋義】 常規常例に拘らず法外の賞を行ひ平常にない所の令を發して非常

の如し卒然者常山之蛇なり其の首を撃ときは、則はち尾至り其の尾を撃ときは首至る其の中を撃てば首尾俱に至る

46 犯_レ之以_レ事。勿_レ告_二以_レ言_一。
 【釋義】 部下を用ゆるに當つては斯くせよ然せよと單に其の事のみを告げ決して其の事の仔細を言ふてはならない、然もなるとは機密が漏れる。

47 犯_レ之以_レ利。勿_レ告_二以_レ害_一。
 【釋義】 又た軍に利ある事のみを知らしめ害になる事を告げてはならない是れは士氣の阻亡を防ぐ爲めである。

48 投_二之_レ亡地_一。然_レ後存。陷_二之_レ死地_一。然_レ後生。
 【釋義】 我が軍の將士をして一致結合せしめて勝利を得るには滅亡すべき地に兵を投げ入れ然る後に生存せしめ、死地に陥れて置いて而して後に生かすの策を取るのである。

敢て問卒然の如くならしむ可きや
 曰く可なり夫れ吳人と
 越人與相惡むなり其の
 船を同じふして濟るに
 當り風に遇ふて其の相

49 夫衆陷於害。然後能爲勝敗。故爲兵之事。在順詳敵之意。

斯く部下の大衆を危害の地に陥れて然る後勝敗を決するのであるから戦さの事は敵の眞意に順ひ其状を詳かにしなければならぬ。

50 并力一向。千里殺將。是謂巧成事。

味方の力を一向に并せ勝つと見れば千里の遠きと雖も攻め掛け敵の將までも討取るべし此れこそ巧みに能く事を成し遂げたと云ふものである。

51 是故政舉之日。夷關折符。無通其使。勵於廊廟之上。以誅其事。

軍政舉り出陣の日定まるときは關所を夷ち塞ぎ關所を通るべき割

救ふや左右の手の如し、
 是故に方馬埋輪も未だ
 恃むに足らず勇を齊ふる
 こと一の若し政こと
 之道也、
 28

57 敵人開闔。必亟入之。先其所愛。微與之期。踐墨隨敵。以決戰事。

敵の動靜を伺ひ開闔即ち隙あれば亟かに攻め入り先づ敵の愛し惜しむ所へ押し掛け敵を動亂せしむべし是れは臨機應變で之れ々々と期する事は出来ないのであるが併し大工が墨繩を用ゆる如く將も軍法に據り一定の法則を踐みつゝ敵の動作に隨ひ以て勝敗を決するのである。

58 是故始如處女。敵人開戶。後如脫兔。敵不及拒。

剛柔皆得る
は地之理也、

【釋】 であるから始めは生娘の初々しく耻かし様に嫺々と油断を與へ敵一度び虚を生ぜば脱兎の如く直ちに附け入り拒ぐ事を出來なくするのである。

故に善く兵を用ゆる者は手を携へて一人を使ふが若くす已ことを得るなり、

將軍之事は静にして以て幽に正にして以て治む能く士卒之耳目を愚にして之れをして知ること無ら使む、

其の事を易へ其の謀りことを革ため人をして識こと無ら使む其の居を易へ其途を迂げて人をして慮ことを得不ら使む、

帥之れ與期すること高きに登りて其の梯はしを去る如し、

帥之與深く諸侯之地に入て其の機を發すれば群羊を驅か若く驅て往き驅て來り之く所を知ること莫し、

三軍之衆を聚め之れを險に投ず此れ將軍之事也、

九地之變屈伸之利人情之理察せ不ばある可から不、

凡そ客爲る之道深きときは専らなり淺きときは散ず、

國を去り境を越て師する者は絶地也、

四に通ずる者は衢地也入ること深き者は重地也入ること淺き者は輕地也固を背にし隘を前にする者は圍地也往く所無き者は死地也、

是故に散地は吾れ將に其志を一にせんとす輕地は吾れ將に之れをし
 て屬せ使めんとす爭地は吾れ將に其後に趨かんとす交地は吾れ將に其
 の守りを謹まんとす衢地は吾れ將に其の結びを固めんとす重地は吾れ
 將に其の食を繼とす圯地は吾れ將に其の途を進まんとす圍地は吾れ將
 に其の闕を塞かんとす死地は吾れ將に之れに示すに活きざるを以てせ
 んとす、
 故に兵之情は圍むときは禦ぐ已とを得れば鬪かふ逼るときは従がふ
 是故に諸侯之謀ごとを知らざる者は豫じめ交はると能は山林險阻沮
 澤之形ちを知らざる者は軍を行かしむと能は不郷道を用ひ不れ者地の
 利を得ると能はず、

四五の者一も知らざるは霸王之兵に非ず、
 夫れ霸王之兵は大國を伐たば其の衆をして聚まるを得不らしむ威敵に
 加はるときは其の交り合ふことを得ず、
 是れ故に天下之交りを争はず天下之權を養はず己之私を信て威敵に加
 ふ故に其の城拔く可く其の國墮る可し、
 無法之賞を施し無政之令を懸く三軍之衆を犯ゆる一人を使ふが如し、
 之れを犯ゆるに事を以てし告るに言を以てすること勿れ、
 之れを犯ゆるに利を以てし告るに害を以てすること勿れ、

【論】 48 之れを亡地に投じて然して後に存し之れを死地に陥いれて然して後に生かす、
【論】 49 夫れ衆害に陥いつて然して後に能勝敗を爲す故に兵を爲す之事は敵の意に順ひ詳かにするに在り、
【論】 50 力を并せて一向ふ千里將を殺さん是れを巧みに能く事を成すと謂ふ
【論】 51 是故に政ごとと擧る之日は關を夷ぢ符を折いて其の使ひを通ずること無し
【論】 52 廊廟之上に厲なして以て其の事を誅む、
【論】 53 敵人開闔す必ず亟かに之れに入り其の愛する所を先にして之れ與期する微く墨を踐で敵に隨つて以て戰事を決す、

【論】 53 是故に始めは處女の如く敵人戸を開く後は脱兎の如し敵拒むに及ば不

【論】 火攻第十二
【論】 孫子の曰く
【論】 凡そ火攻に
【論】 五有り一に
【論】 曰く人を火
【論】 積を火く三
【論】 行火必有因。煙火必素具。

火攻第十二

1

此の篇は火を用ひて敵を攻めるに就ての策を説いたものである。

孫子曰。凡火攻有五。一曰火人。二曰火積。三

曰火庫。四曰火隊。五曰火隊。

【釋義】 凡そ火攻めの法に五つある第一に火人と云ふて敵の士卒を焼き殺す事、第二は火積と云ふて敵に集積してある糧秣の類を焼く事、第三は火庫とて武器陣具糧食等の輜重を焼く事、第四は火隊とて敵城の倉庫を焼く事、第五は火隊とて、敵の隊伍を亂す目的にて陣營を焼く事である

行火必有因。煙火必素具。

之れを亡地に投じて然して後に存し之れを死地に陥いれて然して後に生かす、
 夫れ衆害に陥いつて然して後に能勝敗を爲す故に兵を爲す之事は敵の意に順ひ詳かにするに在り、
 力を并せて一に向ふ千里將を殺さん是れを巧みに能く事を成すと謂ふ
 是故に政ごとと擧る之日は關を夷ぢ符を折いて其の使ひを通ずること無し
 廊廟之上に厲を以て其の事を誅む、
 敵人開闔す必ず亟かに之れに入り其の愛する所を先にして之れ與期する
 微く墨を踐で敵に随つて以て戰事を決す、

是故に始めは處女の如く敵人戸を開く後は脱兎の如し敵拒むに及ば不

火攻第十二

孫子の曰く
 凡そ火攻に
 五有り一に
 曰く人を火
 く二に曰く
 積を火く三
 に曰く輜を

火攻第十二

孫子曰。凡火攻有五。一曰火人。二曰火積。三曰火輜。四曰火庫。五曰火隊。

此の篇は火を用ひて敵を攻めるに就ての策を説いたものである。
 凡そ火攻めの法に五つある第一に火人と云ふて敵の士卒を焼き殺す事、第二は火積と云ふて敵に集積してある糧秣の類を焼く事、第三は火輜とて武器陣具糧食等の輜重を焼く事、第四は火庫とて敵城の倉庫を焼く事、第五は火隊とて、敵の隊伍を亂す目的にて陣營を焼く事である

行火必有因。煙火必素具。

火く四に曰く

五に曰く隊

を火く、

火を行ふ必

ず因ること

有り烟火必

ず素より具

火を發する

火攻を行ひ用ゆるには必らず何か因る所が無ければならない烟火の道具や材料は必ず平素より準備して置くべきである。

發火有時起火有日時者天之燥也。

火を發し起すにつひては時と日とを撰ばなければならぬ、時とは風の吹く時とか又は日照り續きで物の乾燥して居る時である。

日者月在箕壁翼軫也。凡此四宿者風起之日也。

日とは月が天體の箕壁翼軫の四宿の内に在る日を云ふので月が此の四宿に在る時は必ず風が起るものである又た四宿の内の翼軫の坐に月が居れば巽の風、壁に居れば乾の風箕に居れば丑寅の風の吹くものである。

凡火攻必因五火之變而應之。火發於内。

則早應之於外。

凡べて火攻は必ず前に云ふ五火の變に因て之を應用するのである其の應用の仕方は火が我が間者に據て敵の陣中城内に發したならば速かに之に應じて攻め掛れ。

火發而其兵靜者待而勿攻。極其火力可從而從之。不可從則止。

火が起つても敵陣が靜に落ついて居るものは攻める事を見合して其火力原因を見極め攻めて好ければ攻め然もなくば攻めるな。

火可發於外無待於内以時發之。

火を外より放つべき便宜あれば内應を待たなくとも時を考へて燒き立てるが宜しい。

に時有り火を起すに日有り時者天之燥也。日者月箕壁翼軫在也。凡此四宿者風起之日也。凡火攻は

必ず五火之變に因て之れに應ず火に發せられ即ち早く之に外に應ず、兵靜かなる者待て攻め

9 火發上風無攻下風。

風上から焼ける時は風下から攻めるな下手にすると味方を焼くぞ

10 晝風久夜風止。

晝吹き出した風は長時間吹くもので夜る吹き出す風は直き止むものである。

11 凡軍必知五火之變以數守之。

敵計りでは無い味方の軍にも五火の變が起るかも知れないから術數に據り之れを守らなければならない。

12 故以火佐攻者明以水佐攻者強。

火を以て攻撃の佐けとすれば其の火光の爲めに我が働作を見透される虞れがありて我が得失が明かに分かる水を以て攻撃の佐けとすれば

ると勿れ其の火力を極め從ふ可くして之れに從ひ從ふ可から不れば則ち止む、火外に發す可きを内に待と無れ時

其用ひ様に據りては水勢強く何物も防ぐ事の出来ないものである。

13 水可以絶。不可以奪。

水攻を以ては敵の連絡又は糧道を絶つ事は出来るが糧食や陣營を焚き亡ぼし奪ひ去る事は出来ない。

14 夫戰勝攻取而不修其功者凶。命曰費留。

戰に勝ち敵國を攻め取るも後で其功績を修め全ふしなければ凶變が来るものである之れ等を無益の費へを留めるものと命ずるのである。

15 故曰明主慮之。良將修之。非利不動。非得不用。非危不戰。

其れだから明君良將は深く考慮して之れを慮り之れを修めるので勝利と見なければ軍を動かさない、得策と思はなければ兵を用ひない危

を以て之れを發せよ、

火^ひ上^{じやう}風^{ふう}に發^{はつ}

らは下^か風^{ふう}を攻^せる^{こと}無^な

れ、

晝^{ひる}の風^{かぜ}は久^{ひさ}しく夜^{よる}の風^{かぜ}

は止^やむ、

急の場合でなければ戦争は爲ないのである。

主¹⁶不可^レ以^レ怒^レ而^レ興^レ師^ヲ。將^レ不可^レ以^レ慍^レ而^レ致^レ戰^ヲ。合^ニ於^ニ利^ニ而^レ動^ス。不^レ合^ニ於^ニ利^ニ而^レ止^ス。

君主たる者は一朝の怒りの爲めに師を興してはならない、大將たる者も慍りを含んで戦争を仕てはならない、勝利を得べき道理に合して始めて軍を動かすので道理に合はない時は動かさないのである。

怒¹⁷可以^レ復^ス喜^ヲ。慍^レ可以^レ復^ス說^ヲ。

一旦は怒ても復た喜ぶ事がある慍ほる事があるとも忘れるが好い復た悦ぶ事があるであろう輕忽に事を發してからは最早取返しは附かないのである。

亡¹⁸國^ノ不^レ可^レ以^レ復^ス存^ス。死^者不^レ可^レ以^レ復^ス生^ス。故^ニ明^主

慎^レ之^ヲ。良^將警^レ之^ヲ。此^ニ安^ク國^ヲ全^ク軍^ノ之^道也。

戦ひ敗れて國亡びれば復た存す可からず將士一たび死せば復た生く可からず故に明君は戦を慎み良將は之を警めるのである斯くありてこそ國を安んじ軍を全ふするの道と云ふのである。

以¹²て之^ノを守^ルれ、

故¹³に火^ヲを以^テ攻^ムを佐^スくる者^ハ明^{ナリ}水^ヲを以^テ攻^ムを佐^スくる者^ハ強^シ、

水¹⁴は以^テ絶^ス可^ク以^テ奪^ム可^クから不^ズ、

夫¹⁵れ戦^ヒ勝^チ攻^取りて其^ノ功^ヲを修^メ不^ル者^ハ凶^{ナリ}命^ヲじて費^留と曰^フ

故^ニ曰^ク明^主は之^レを慮^ハかり良^將は之^レを修^ム利^ニ非^ズれば動^カ不^ズ

得るに非ざれば用ひ不危に非ざれば戦は不、
 主は怒を以て師を興す可からず、將は愠を以て戦ひを致す可からず、
 利に合して動き利に合せ不して止む、
 怒りは以て復た喜ぶ可し愠りは以て復た説ふ可し、
 亡國は以て復た存す可からず不死する者は以て復生く可からず故に明主
 は之れを慎み良將之れを警しむ此れ國を安じ軍を全ふする之道也、

用間第十二

1

用間第十二

此篇は間牒の用ひ方を説きたるもので間とは問者間牒のこととて細
 作即ち廻し者の事である。

孫子の曰く
 凡て師を興
 すと十萬出
 征すると千
 里百姓之費
 へ公家之奉
 日に千金を
 費やす内外
 騒動し道路
 に怠たり事

孫子曰。凡興師十萬。出征千里百姓之費。公
 家之奉。日費千金。内外騒動。怠於道路。不
 得操事者。七十萬家。相守數年。以爭一日
 之勝。

十萬の兵を外國へ出せば百姓人民の費へから邦家の物入りは莫大
 である上に内外は騒動し軍役の爲めに人民は疲れ果て、道路に怠る様に
 なり七軒の組合の家は一人の出征者の爲めに種々の費への掛る爲め他の
 事の出来ないものが七十萬軒に及ぶので而も戦機の熟する迄は數年間相
 對峙して守り其れで以て一日の勝を争ふのである。

而愛爵祿百金。不知敵之情者。不仁之至也。
 非人之將也。非主之佐也。非勝之主也。

を操を得不
 る者七十萬
 家相守るこ
 と數年以て
 一日之勝を
 争そふ、
 爵祿百金を
 愛みて敵之
 情を知ら不
 る者是不仁

4 故明君賢將、所以動而勝人。成功出於衆者。先知也。

明君賢將が軍を動かせば敵に勝ち其の成功が凡衆の上に出ると云ふのは敵狀萬端を先きに熟知して掛るからである。

5 先知者。不可取於鬼神。不可象於事。不可驗於度。必取於人。知敵之情者也。

敵情を先きに知ると云ふ事は神佛や物の象ちや天の度數天文などで分るものでない必ず人に據らなければならぬのである。

之至り也人
 之將に非ず
 勝つ之主に
 非ず、

6 故用間有五。有郷間。有内間。有反間。有死間。有生間。五間俱起。莫知其道。是謂神紀。人君之寶也。

間者を用ゆるに五つの種類がある其は土地の者を用ゆる郷間、敵の官人を用ゆる内官、敵の間者を却て利用する反間決死の覺悟で其の任に當る死間、生きて歸りて敵狀を報告する生間の五つである此れを用ひて居乍ら少しも敵に其事を心附かせないのを神紀とも云ふべきで誠に人の寶である。

7 郷間者。因其郷人而用之。

郷間とは敵國の土地のものを使ひ方便手段を用ひて敵狀を探るのである。

8 内間者。因其官人而用之。

故に明君賢
 將動ひて人
 に勝ち成功
 衆に出る所
 以の者は先
 づ知れば也

先づ知る者^謂は鬼神に取^るる可^かからず^不事^事に象^かたる可^かからず^不驗^驗む可^かからず^不必^必ず人^人に取^取て敵^敵之情^情を知る者^者也^也故^故に間^間を用^用

内間とは敵の官人役人を使ふのである。

9 反間者。因其敵間而用之。

反間とは敵より我れに入れ込ませ又は敵の使ふ間者を味方に取り込むか又は計略に依りて彼れを欺くのである。

10 死間者。爲誑事於外。令吾間知之而傳於敵間也。

死間とは自分の身を殺して掛るので作り事を態と爲して味方の間者を欺き其の口から敵の間者へ傳はり敵をして其人又は其事を信ぜしむる様に爲るのである。

11 生間者。反報也。

生間とは生命を完ふして歸り諸般の報告を爲すもので種々に假裝

ゆるに五有^有り郷間有^有り内間有^有り反^反間有^有り死^死間有^有り生^生間有^有り五^五間俱^俱に起^起りて其^其の道^道を知^知るこ^こと莫^莫し是^是れを神^神紀^紀と謂^謂ふ人^人君^君之^之寶^寶

して敵地に入り込み其の内情を探るものである。

12 故三軍之事。莫親於間。賞莫厚於間。事莫密於間。非聖智不能用間。非仁義不能使間。非微妙不能得間之實。微哉微哉。無所不用間也。

故に軍中で大將に親くするのは間者が第一で随つて恩賞も重いのである事柄に於ても間者程審密に爲なければならぬ事は無いので聖人智者でなければ間者を用ゆる事は出来ず仁義に深い人でなければ之れを使用出来ず機微に事を見るの人でなければ間者の報告の真相を知る事は六ヶしい微々細妙の事までも間に用いなければいけない。

13 間事未發。而先聞者。聞與所告者皆死。

也、
 郷間者其の
 郷人に因て
 之れを用ゆ
 内間者其の
 官人に因て
 之れを用ゆ
 反間は其敵
 間に因て之

問者に命じたる事にて未だ發現せざる内に他に聞ゆる事があれば其聞いたものも告げた者も悉く死罪に處せなければならぬ。

14 凡軍之所欲撃。城之所欲攻。人之所欲殺。

必先知其守將。左右。謁者。門者。舍人之姓名。

令吾間必索知之。

凡べて撃たんとする敵軍、攻んとする敵城、殺そうと思ふ敵の人物については先づ其の大將は勿論左右に附随する人々取次役から門番雜人迄の姓名を必らず調べ置き我が間者をして其の性行嗜好動作等悉く探索せしめ置かなければならぬ。

15 必索敵間之來間我者。因而利之。導而舍之。故反間可得而用也。

を用ゆ、
 死間者誑事
 を外に爲し
 て吾が間を
 して之れを
 知ら令め敵
 の間に傳へ
 る也、
 生間者反報
 する也、

敵の間者は必らず探し出して何かの因縁をつけて此れを利用する様に誘導して此れを留め置き此奴の耳目を誑かして反間の策を施すのである。

16 因是而知之。故郷間内間。可得而使也。

是の反間に利用する者に因つて敵の人民や官人を間者に使ふ事が出来るのである。

17 因是而知之。故死間爲誑事。可使告敵。

死間も敵の反間に據りて其の作り事を敵に告げしめる事が出来て始めて事實らしくなるのである。

18 因是而知之。故生間。可使如期。

生間を使ふにも此の反間に據り敵状を知る事が出来るから安全に

讀方 12

故に三軍之
事間より親
しきは莫し
賞は間より
厚きは莫し
事は間より
密なるは莫
し聖智に非
ずんば間を
用ゆること

使用する事が出来る。

19 五間之事。主必知之。知之必在於反間。故反
間不可不厚也。

五間即ち間者の事に關しては主將たる者必ず自ら處置しなければならぬ。此れが眞偽如何と云ふ事を知察するには敵より來て居る間者の言に徴さなければならぬ。反間は厚遇しなければイケない。

20 昔殷之興也。伊摯在夏。周之興也。呂牙在殷。
故明君賢將。能以上智爲間者。必成大功。

昔し殷の湯王の勃興するに當りては伊尹夏の國に在りて間者を勉め周の武王興るに方りては大公望呂尙間牒として殷に在りたり故に明君賢將にして能く上智の人を以て間者に使ふ時は必ず大功を來すに定まつ

能は不仁義

に非ずんば

間を使ふこ

と能は不微

妙に非ざれば

所無き也

13

14

凡そ軍之擊んと欲する所ろ城之攻んと欲する所ろ人之殺さんと欲する所ろ
必ず先づ其の守將の左右謁者門者舍人之姓名を知り吾間をして必ず之
れを索め知ら令む、

て居る。

21 此兵之要。三軍之所恃而動也。

此の間者を用ゆると云ふ事は軍法上肝要の事で三軍は此れを恃み
として動くのであるから間者につひては大切に考慮すべきである。

此の間者を用ゆると云ふ事は軍法上肝要の事で三軍は此れを恃み
として動くのであるから間者につひては大切に考慮すべきである。

13 間の事未だ發ららず先聞える者は聞と告る所ろの者興皆死す、

必ず敵の間之來つて我れを問する者を索めて因て之れを利し導いて之れを舍す反間得て用ゆ可し、
 是れに因て之れを知る故に郷間内間得て使ふ可し、
 是れに因て之れを知る故に死間は誑事を爲し敵に告げ使む可し、
 是れに因て之れを知る故に生間は期の如くなら使む可し、
 五間之事は主必ず之れを知る之れを知ること必ず反間に在り故に反間は厚ふせ不んばある可から不、
 昔し殷之興るや伊摯夏に在り周之興るや呂牙殷に在り故に明君賢將能

此れ兵之要三軍之恃んで動く所也、
 上智を以て間と爲者は必ず大功を成す、

孫子卷之下畢

孫子和譯の後に書す

生存競争は社會進化の原則で隨て弱肉強食と云ふ事は免かれ得べからざる現象である。國家と言はず個人と云はず不知不識常に無數の敵と闘ひつゝあるのである。所謂成功者なるものは何等かの手段方式を以て此敵に打勝た者である。其の手段方式の上に盛に兵法を應用したと云ふ證據は。古來吾々の間に「掛引」「形勢」などと云ふ語が用ひられて居るのを見ても解る。一代にして豪富となりし紀文。又名奉行の大岡越前守の座側には常に孫子が置かれてあつた。と傳へられて居るのは如何にも首肯される事である。若し本書中の或る字句を改めたならば或は直ちに「人世成功秘訣」と銘を打つ事が出来ると思ふ。不肖淺學を憚らず余が本書を編したのは此心持からである。願くは他日諸君の高教を須つて處世上より見たる孫子を編纂したいと思ふのである。幸に一臂の勞を賜はらん事を偏に希望する

明治四十三年五月

利水押久保生

明治四十三年七月二十日印刷
 明治四十三年七月二十七日發行

定價金四十錢

漢文叢書

孫子

著作
所有

編者 押久保利水

發行者 東京市日本橋區寄屋町六番地 木田吉太郎

發行者 東京市日本橋區下槇町十二番地 今津隆治

發行者 東京市芝區愛宕町三丁目九番地 中野鏡太郎

印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 東洋印刷株式會社

發行所

東京市日本橋區數寄屋町六番地
振替貯金口座東京一三九八一

集文館書店

發行所

東京市日本橋區下槇町十二番地
振替貯金口座東京六四三三五

如山堂書店

ポケット漢文叢書之發刊

一 孫

子

既

刊

一 六

韜三略

既

刊

一 古

文眞寶

近

刊

一 文

章軌範

近

刊

一 榮

根

譚

近

刊

一 老

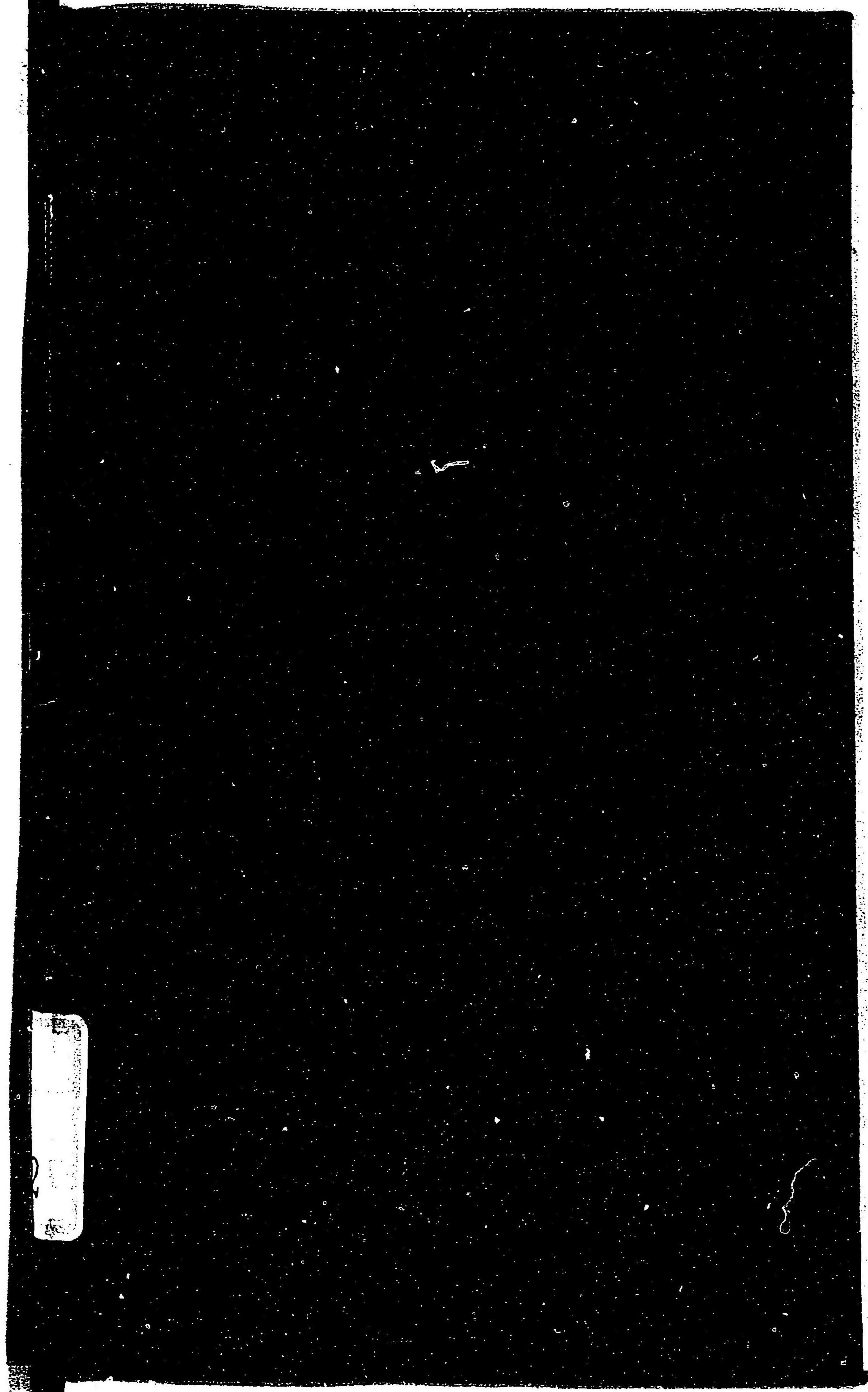
子

近

刊

261

416





052766-000-5

特65-112

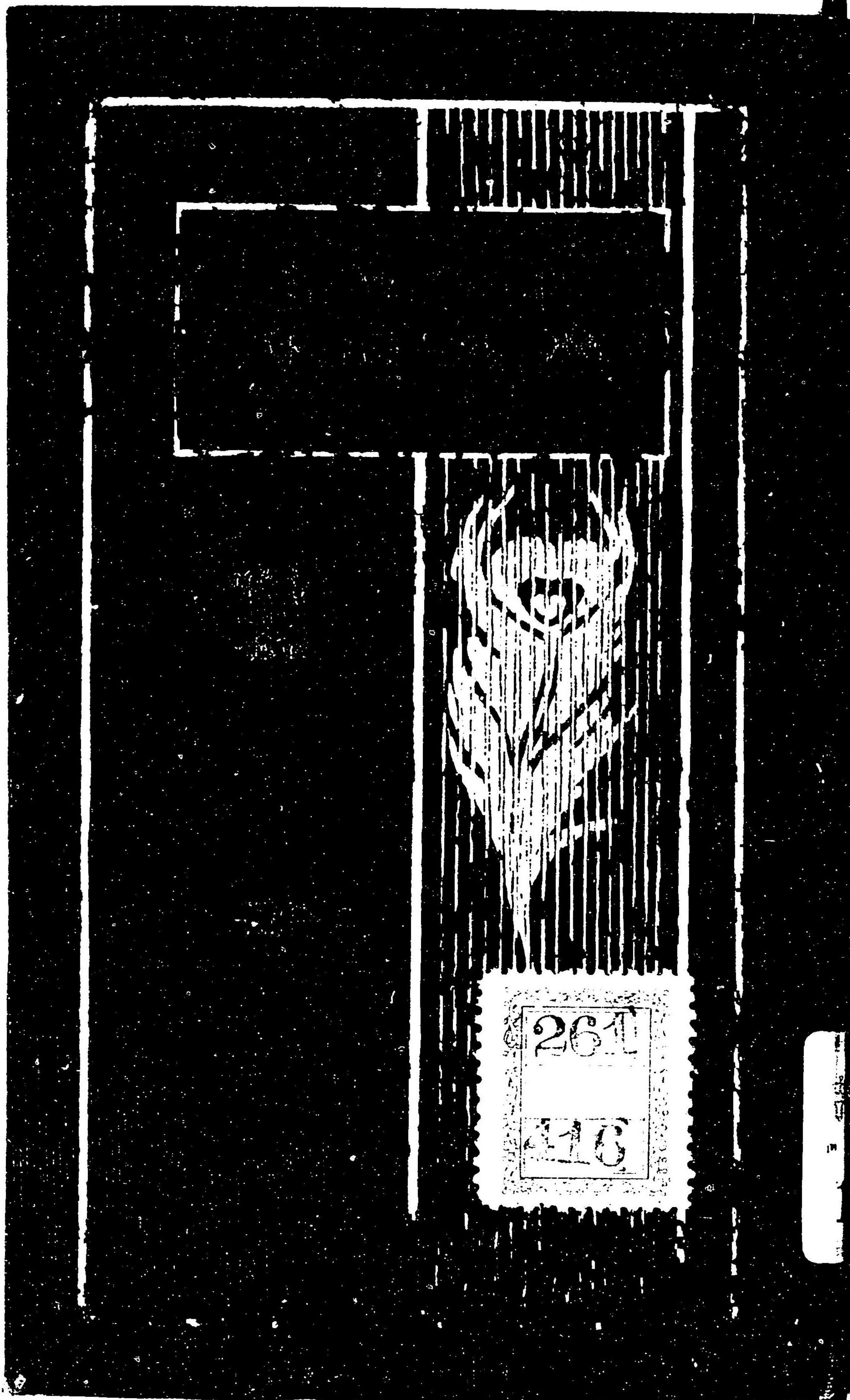
孫子(訓解)

押久保 利水/編

M43

BFI-0006





261
1918